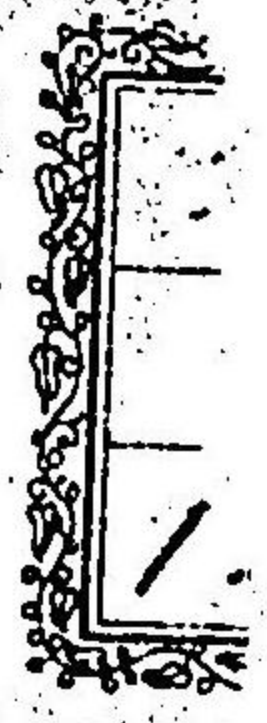
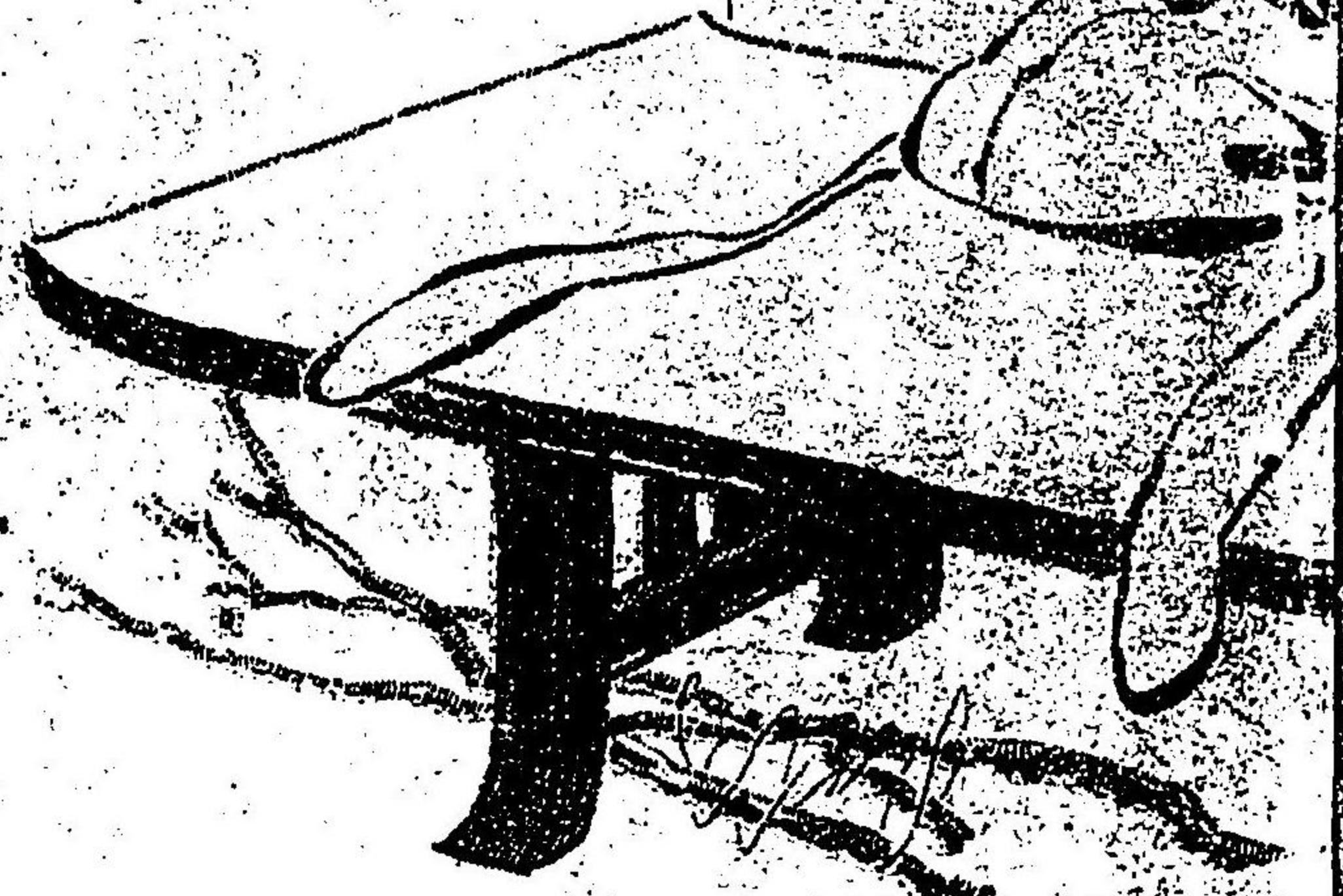


五ノ下ノ

あまの  
草

藤原新治著



序

瓶 中 梅 あり 柳 あり

柳 眼 は 青 く 梅 唇 は

清 し 之 に 對 し て わ

れ は 詩 を 思 ふ。

机 上 の 浪 華 柳 二 卷

秋 渚 子 の 文 藻 を 收

む 今 は 古 に 實 を 記

し 事 を 叙 し た る も

の な り。 之 に 對 し て

わ れ は 感 興 を 生 ず。

梅 柳 の 春 に 詩 思 を 催 す は、 自 然 美 の 力



之を致すなり。浪華艸の文藻に感興を生ずるは、藝術美の力之を致すなり。われはわが藝術美のやがて自然美を超越し、藝術をして自然を生むに至らんことを自から希ふ。梅柳の美華を吐ける室に於て、浪華艸に對せるわれに此感あり。記して梅柳

に問ひ秋渚子に問ひ讀者に問ふ。

庚子一月 浪華犬齋橋畔假寓に於て

浩々 歌客

浪華草の序

最も多かるべくして、而して事實のこれに反するは、わが浪華の史的文書、こきなり。

海内の都府、その開創の古くして、その富庶の冠たる、孰れか、わが浪華に若くものあらん。史的文書の最も多かるべきを謂

ふ、是が爲なり。而して、事實のこれに反する所以のものは、何ぞや。

文士と浪華との關係を致ふれば、蓋し、思半に過ぐるものあるべし。而して、是れ尙、眞正の解釋を與ふるに、不十分ならん。われは、よれを一般文士の、筆まめならざる罪に歸せんとす。我が邦文士の筆まめ

ならざりしは、獨り浪華の史的文書に少くを見て、爾云ふのみにあらざるなり。友人磯野秋澄は、筆まめなる文士なり。その浪華に在住する、二十年の久しきを以てして、その敏腕を揮ふを斬まず、見聞する所ある、之を文筆に上さずば、己まざらんとす。

浪華の史的文書の一なる、『浪華草』の著は、  
こゝに出でたり。餘地おほき、浪華の史的  
文書の寶庫が、たしかにその貧しさを減  
じ得たるをよるこふ。

庚子一月

木崎好尚

序

大厦高樓軒を聯ね、煤烟空に充ち、砂塵路に起るも  
のこれ今日の大坂なり。鐵銖の利に齷齪として、銅  
臭鼻を衝き、俗氣紛々たるもの、これ今日の大坂な  
り。排するものは、此の故にいはいはく、大坂は文學隆起  
すべき地に非ず、會々之あるも、其の文學は、すべて  
利己なり卑野なりと。あゝ、大坂たるもの、この批評  
を甘受せざるべからざるか。  
風さむき冬の朝、袂すゞしき夏の夕、試に北にゆき

南にゆきて、凌雲閣をよぎ天王寺浮圖に上り見よ。  
白衣を装うて青巒の上よ立てる六甲能勢の峯々、  
茅渚の浦回に風そよぎて、鳥がくれゆく眞帆片帆  
は、風骨を養ふに足りざるか。又去つて東郊に遊び  
西流に竿させ。鳥歌ひ花咲ふ紅雲滿地の春の桃山、  
月冨え櫺をみぢせる長堤十里の秋の木津川は、雅  
懷をやるに似せずや。居は氣を移し養は休を移す  
と。大坂の地又この秀麗なる山水あり、而して遂に  
高雅なる文學は見るを得ざるか。

想ひ見よ。高津の高臺に長柄の殿居に、香ぐはしか  
りし咲くやこの花は、何處に匂ひいでにしぞ。能因  
が、心わらん人に見せばやと歌ひて、益其の詩趣を  
養ひ得たるは、いづくの春の景色ありしぞ。國學の  
中興契沖長流ハ、いづくに住居せし。小説の泰斗西  
南鶴嶺ハ、いづくに生れしぞ。談林俳壇の始祖、宗因  
來山ハ、いかに。遊戯文字の先輩、下庵貞柳ハ、いかに。  
櫓太鼓の音川竹の水に響きし、竹本豊竹二座のお  
もかげは如何。狂蝶痴蜂の姿を網島の流に寫し、

近松竹田の筆のあやは如何。歌林の良匠家隆、俳壇の祖翁桃青はいづくにてか終りし。懷徳、混沌、梅花、梅墩の詩社學堂に、當代の鴻儒、俊才の相馳逐せしはいづれの地ぞ。あゝ、大坂の古の文華はかくの如く爛漫たりしに非ずや。新しき大坂は共に文學を語るに足らざらん、しかも古き浪華はいかで、文學以外の地として排し去るべけんや。

近頃、關西文學の勃興を唱ふるものあり、大坂文壇興起の聲は甚大なり。片々たる雜誌かしてこにい

圓々たる會合こゝに成れり。しかも猶世人は大坂の文學の地たるを否定し、卑野利己の分子ありとして、之を排するは何故ぞや。土地あしきによるか、文士務めざるによるか。浪華の山、大坂の水、既にかくの如く、秀麗かり、土地何のせむべき所かあらん。思へ今の文學をいふもの、多くはこれ白面黄口の徒、關西文學といふ美名の下に隠れて、特色も亦も文學を臚列し、鬻文弄筆、浮華誇張にして自快とし、徒に文學を口にするのみにして、其の研究すべき



ものなるを知らざる輩多し。かくの如くにして、百の雑誌、千の會合ありとも、何の口か文壇の眞勢力を握るを得べき。わ、古の浪華を研めずして、徒に大坂文學の隆盛を望む、縁木求魚の謗は、又この輩にも下すべきか。わ、利己性は、大坂文士も見るべからん、しかも大阪文壇は、永く卑野の評を甘受すべからざるなり。

我が畏友秋渚君は、深く浪華文學を研究して、夙に大坂文學の發揚に苦心せる人なり。虚しき名聲を

求めずして、實ある効果を収めんことをつとめ、微なるを顯し、幽めるを闡きて、こゝに浪華草を綴り給へり。進篇すべてこれ、多年考證の餘、研鑽の後に成りしもの。之あり、共に浪華文學を語るべし。今や書をよせてその卷首に序せんことを望まむ。余もと淺學不敏、蕪雜冗漫、未錦上に花を添ふる能はずと雖、又些浪華文學を實實に研究せる一人を以つて自期せる者、即快諾して、こゝに浪華文學の過去を懐ひ、大坂文壇の將來を想ひて、所感一篇を録し

この書の序に代ふるは、秋渚君が眞蹠の勞を多  
としてあり。

明治三十三年一月廿五日

大和郡山臨池書房にて

木卯庵一柳の芳風しるす

# 浪華草

## 目次

### 名家訪問録

#### 蓼の露

- 一、小序……………一
- 二、中村良顯の生立……………足代弘訓……………二
- 三、長田鶴夫……………殿村茂濟……………村上潔夫……………安田長穂……………四
- 四、中村良臣……………夏目夔磨……………その子兄瓶……………本居大平……………
- 二平一樹……………六

五、近藤芳樹……加納諸平……村田春門……………八

墨のいをり

一、小序……………十三

二、村田海石の生立……正月堂……………十四

三、海石……中澤雪塘……………十六

四、海石……萩原秋巖……卷鷗洲……………十七

五、海石と小學習字本と……………十九

六、中澤雪城……力士不知火……………二十一

七、卷菱湖……萩原秋巖……………二十二

檜の陰

一、小序……行徳玉江……………二十五

二、玉江……今枝夢梅……鼎金城……貫名海屋……………二十六

三、畫僧鐵翁……………二十八

四、鼎金城の小傳……廣瀬旭莊……………二十九

五、藤井藍田……蜂蝶戀香樓……………三十一

松堂閒話

一、小序……山田松堂……藤澤東咳……森田節齋……………

無絃女史……………三十五

二、簡塾……紫原靖廬……福永古香……松堂……………

無絃女史破鏡……破鏡再照……………三十六

三、古六新六の争……節齋の終焉……………四十

四、森田節齋……吉田松蔭……奥野小山……相馬九方……………

……………四十一

五、節齋及びその門下の古文背誦……………四十二

### 碧山艸堂

一、小 序……………四十四

二、日柳三舟の幼時……………荒川栗園……………四十四

三、日柳柳東……………高杉東行……………四十六

四、河野鐵兜……………野口松陽……………宗像雲閣……………四十七

五、鐵兜……………柳東……………三舟……………四十九

六、附載……………三舟の手簡……………野口寧齋の手簡……………五十

### 清來山房

一、小 序……………五十一

二、上田耕冲……………上田耕夫……………長山孔寅……………五十五

三、上田公長……………田中秋亭……………五十七

四、森狙仙……………周峰……………雄仙……………徹山……………五十九

### 梅 清 處

一、小 序……………六十一

二、山本梅畦……………山本竹溪……………六十一

三、山本竹溪……………安積良齋……………六十二

六

四、安積氏の塾……………六十三

五、竹溪の詩學……………齋藤拙堂……………六十五

易堂墨譚

一、小序……………六十六

二、寺西易堂……………藤森弘庵……………六十六

三、貫名海屋……………卷菱湖……………六十八

四、後藤松陰……………林鶴梁……………易堂の書學……………七十

百園

一、小序……………敷田年治……………七十二

二、鈴木重胤……………黒川春村……………黒川真頼……………栗田寛……………

小田清雄……………七十四

三、百園の著述……………七十六

泊園書院

一、小序……………藤澤南岳……………浪華の徂徠派……………七十七

二、南岳の學統……………その家庭……………七十八

三、泊園書院の再興……………歳寒陰社……………七十九

みをつく

- 一、篠崎小竹……………一
- 二、夢清軒……………五勝樓……………福壽草の唄……………四
- 三、後藤松陰……………篠門の四天王……………七
- 四、天満堀川……………橋本香坡の終焉……………小竹の後裔……………十一
- 五、黒澤翁滿……………有賀長隣……………岸田素屋……………十五
- 六、萩原廣道……………十七
- 七、雙松岡……………重野成齋……………廣瀬旭莊……………廿二
- 八、曉鐘成……………鍋島の濱……………大石良雄手栽の松……………  
東照權現の祠……………建國寺……………洗心洞……………二十四

- 九、片山北海その他……………二十八
- 十、嘉永安政間の南北畫人の故居……………三十

浪華詩壇小史

浪華の漢學開始……………鳥山一派の詩……………

懷徳堂の一派……………混沌詩社の一團……………

梅花社の一派……………梅墩其他の詩……………

浪華墓誌

藤原家隆……………一

本多忠朝……………二

石井宇右衛門……………三

夕霧……………四

椀久……………五

西山宗因……………六

◆井原西鶴……………八

松尾芭蕉……………十

契沖……………十一

矢頭教照、教兼……………十二

小西來山……………十三

五井持軒……………十四

紙治、小春……………十五

近松巢林子……………十六

鯛屋貞柳……………十七

平泉鬼貫……………十八

武田野坡……………十八

紀海音……………二十

中井發庵……………二十

松木淡々……………二十一

中島貫齋……………二十三

五井蘭洲……………二十三

菅沼東郭……………二十五

菅谷甘谷……………二十五

古林正桂……………二十六

兄樂郊……………二十七

永富獨嘯庵……………二十八

並木正三……………二十八

大畠默翁……………三十



河野 恕齋.....三十一

葛 子 琴.....三十一

澁 井 太 室.....三十三

飯 岡 澹 寧.....三十四

金 谷 三 石.....三十五

片 山 北 海.....三十五

入 江 長 輔.....三十六

十 時 梅 厓.....三十八

中 井 竹 山.....四十

中 井 履 軒.....四十

墨 江 武 禪.....四十一

奧 田 拙 古.....四十二

並 木 五 瓶.....四十二

橋 本 稻 彦.....四十三

安 藤 秋 里.....四十四

篠 崎 三 島.....四十五

齋 部 道 足.....四十六

森 狙 仙.....四十七

森 周 峯.....四十七

一 本 亭 魚 鱗.....四十八

尾崎雅嘉	四十九
衣川長秋	五十
春田橫塘	五十一
春田古處	五十一
三井棗州	五十一
金谷興詩	五十二
田能村竹田	五十三
村田春門	五十五
中村芝翫	五十六
石津亮澄	五十七

小島形山	五十八
齋藤鑾江	五十八
篠崎小竹	六十
篠崎竹陰	六十一
奥野小山	六十一
黑澤翁滿	六十二
二東生穉	六十三
三浦道齋	六十四
阪本鼎齋	六十四
三瓶信庵	六十五

熊谷直好	六十六
鼎金城	六十七
廣瀬旭莊	六十七
藤井藍田	六十八
萩原廣道	六十八
後藤松陰	六十九
藤澤東咳	六十九
僧物外	七十
今泉芝軒	七十
岸田素屋	七十一

並河樺翁	七十二
高見照陽	七十二
魚住荊石	七十三
阪本葵園	七十三
河竹能進	七十四

以上

浪華くさのはしがり

年ころ、書きやりたる、浪華の今の昔の事を  
とついでて、一巻のふみには、なしつ。これに、  
またの名をおはせたるは、古き歌のことは  
によりてなり。そのうた、

秋來ればはにさきいづるなには草

かりそめながら見ゆるゆふぎり

明治庚子の筆はしめに

秋活生しるしぬ

全

民

華髮星... 念老... 漫...  
花... 醉... 婆... 婆... 婆... 婆... 婆... 婆...  
休矣... 狂... 態... 癡... 情... 下... 六... 步...

七... 人

...

藤 澤 南 岳 先 生

中村良顯先

敷田年治先和歌

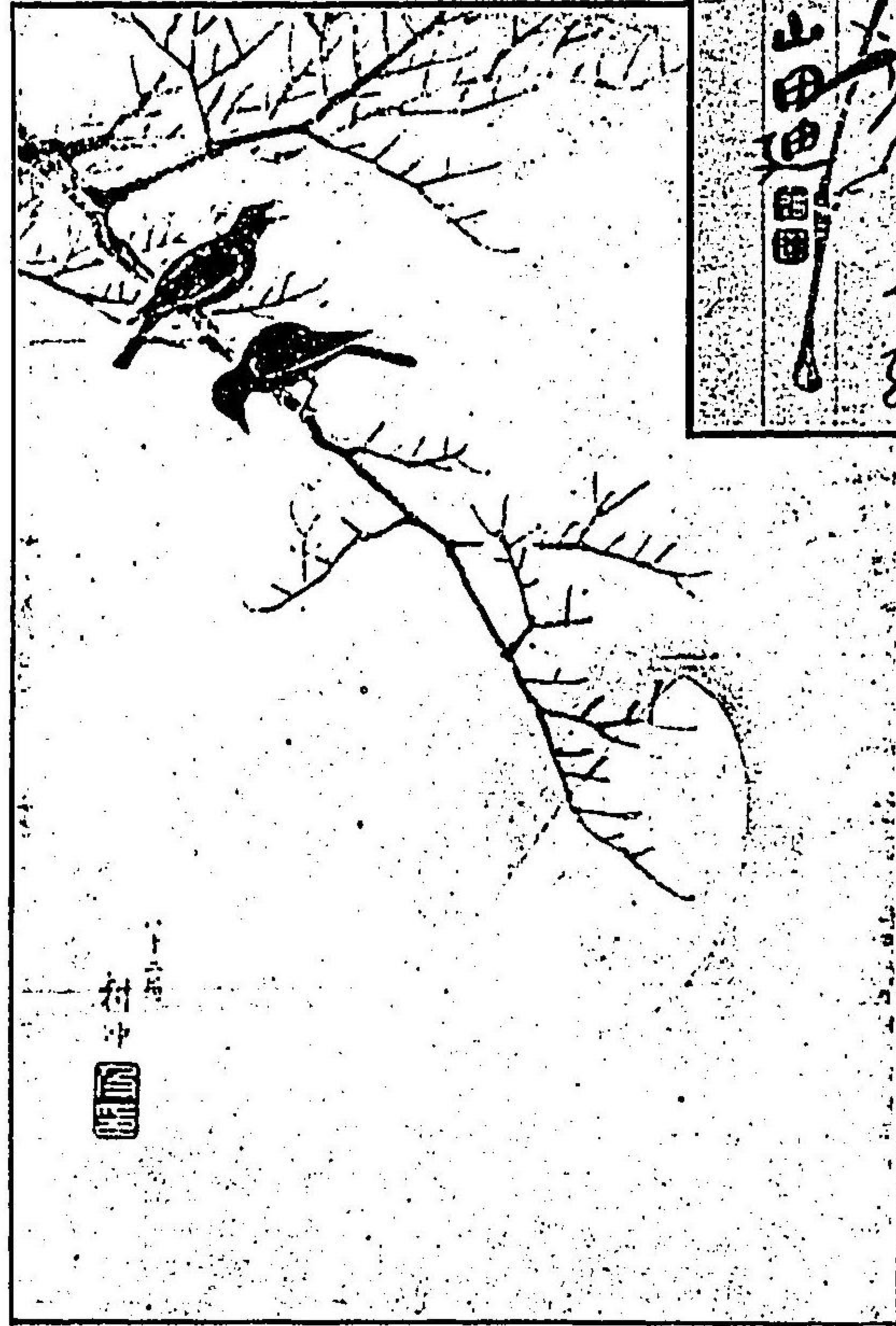
和歌  
中村良顯  
敷田年治  
和歌



山田連先生

山田連先生  
 先生之遺德  
 猶存於心  
 先生之遺教  
 猶存於身  
 先生之遺風  
 猶存於俗  
 先生之遺訓  
 猶存於心  
 先生之遺志  
 猶存於身  
 先生之遺業  
 猶存於俗  
 先生之遺教  
 猶存於心  
 先生之遺風  
 猶存於俗  
 先生之遺訓  
 猶存於心  
 先生之遺志  
 猶存於身  
 先生之遺業  
 猶存於俗

上田耕冲先生



上田耕冲  
 先生



寺西易堂先生

朱門連揖在梁園  
清興何如  
此味芳聖尔  
菊簞客三五  
首  
老禪榻闌茶時

易堂老人

山本憲先生

玉音似遠水遠芳宛梅  
高標比古人是賢之清  
梅  
山本憲書

日柳三舟先生

痛友散如秋氣西風新  
半漁樵醉浮大白忙心  
以紅助字銷食不飲精  
酒唯每量可之蕉加餐  
食稻吹口長腰勝折海  
華真偶象 三舟

秋風冷冽而寒送陸  
 憐衣白錦書受眼青  
 半夜更懷陶靖節  
 一紙黃菊有惟香  
 己亥十月  
 玉江翁人併歌



行德玉江先生

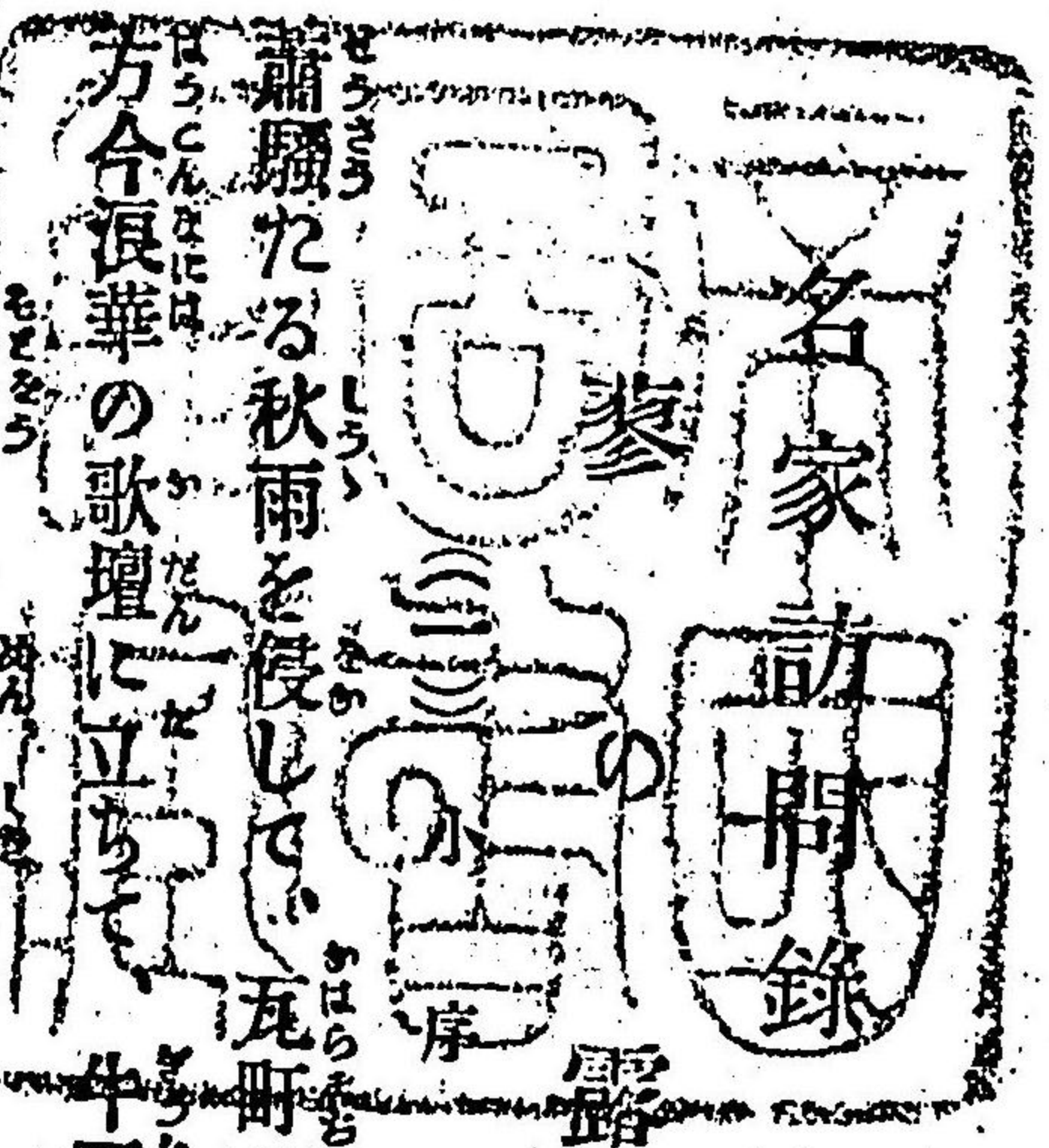
村田海石先生

字石亭  
紙竹詩雅者未  
生編  
海石



浪華草

磯野秋渚



蕭騷たる秋雨を侵して、瓦町の蓼生園をとぶらひぬ。蓼生園とは、  
方合浪華の歌壇に立ちて、牛耳を執れる中村良顯翁の家の號なり。  
おのれ本翁と一面の識はなかりしが、今日故ありて始めて、翁の  
光霽に接しぬるは、滋岡從長ぬしを介してなり。おのれ初め刺を通

せしや、翁温然として迎へられ、直ちに閑室に延き、若香の裏、おのれが問に應じ、談屑霏々として、少しも眇域を設けられず。忽ちにして、経歴談、忽ちにして耳食談、殆んど、おのれに果然たらしめたり。やがて退りて、これを経緯しつること左の如し。茲に今日といへるは、己亥八月三十一日なり。

(二二) 中村良顯の生立……足代弘訓

○翁は、實に良臣大人の子にあらず、甥なり。生父は、赤穂の藩士中村清左衛門君といひて、武藝に長けたる人にて、良臣大人の兄なり。翁は、兄弟二人にして、兄なる人、家を継ぎたれば、弟の身の夙くより叔父の家に養はれたり。良臣、伊丹に寄寓して、徒を聚め

和歌を教授せしとき、翁常に膝下に侍りて、講修怠らざりしが、後父の命により、笈を負ひて、伊勢に赴き、足代寛居翁(弘訓)に従遊して、古學を修め、更に紀の和歌山に加納栲園翁(諸平)に就きて和歌の道を研鑽し學成りぬる後、復伊丹に還り、父に代りて、後進を誘掖せり。その浪華に來住せしは、明治十五年なりき。

○翁の始めて、足代氏に學びしや、三尺の童子すら、古事記を誦すといふさまに驚きしかど、詠歌といへば、翁と凌駕する程の同窓生あらずしより、我こそは、上手なれ、と思ひなし、いと誇顔にてありしが、後、栲園の門に遊ぶに及びては誰彼をいはず、歌よまぬはなく、よみて巧みならぬはなきに、また一驚を喫し、深く自ら恥

らひ益斯道を攻めて、遂に今日あるを致せるなりけり。

(三三) 長田鶴夫……殿村茂濟……村上潔夫……安田長穂

◎翁の少かりし時、土佐堀裏町（今の梅花女学校の地）に、加鳥屋作五郎と呼びし富豪ありき。此人少壯の日に、殿村茂濟（米平）と豪奢を競ひ、北の新地の某樓に牽牛花の會を催し、數十の美妓に盛粧を凝させて、來賓の酒間を周旋せしめ、一日に、數百金を擲つなどの事をなし、米平を壓倒せんとせしこと、度重りしかば、別家簡伴の輩いたく家産の傾かんことを憂へ、相謀りて、作五郎を家の親戚なる和歌山の雜賀屋長兵衛にあづけて、暫しが程、謹慎せしめたり。○長兵衛も亦豪商にして、學を好み、風流心に富みたれば、藤垣内

大平翁の門にあそびて、歌文に拙ならず、雅名と安田長穂といへり。○作五郎は、この人に勧められ間なる餘り、藤垣内に通ひて、志貴島の道を辿り、終に一家を成すに至れり。浪華に還りし後は、又村上潔夫にも従ひて、學ますく進み、前の豪奢は、一洗せられて、風流清楚の生涯を了し、雅名を長田鶴夫とて、長へに、浪華文學史上に清痕を發するなめり。翁の先人良臣は、鶴夫と前後師を同じうしたれば、その交ひ、殊に深かりき。この故に、翁も鶴夫の提携を受けつるが、鶴夫曾て翁にむかひて、三十一文字は、尊甫に學ぶが好し、長歌は、吾こそ教ふべけれ、といひき。この一言にても、その抱負は見ゆめり。

附言おのれが藏せる類題和歌浪花集の中より鶴夫が短歌二三首を茲にぬきはして風調の一斑をしめしつ其得意としたりし長歌は他日謄舎翁よりこひうけて載することゝもあらん

夏眺望

庭萩

白鷺のむれゆく方に森見わたみどりすしさをちの川つら

鳴く蟲のすみかどまでになりにつけり一本うるしあき萩の花

月前友

さゝの葉の露うち拂ひ秋の夜の月にはうとき人も訪ひけり

(四)

中村良臣……夏目麴麿……その子兒瓶……本

居大平……二平一樹

◎良臣が帷を伊丹に下せる時、鈴門の巨擘なる夏目麴麿、男兒瓶を拉して、畿内の皇陵巡拜の途すがら、訪ひ來ぬ。良臣には、先輩

の事なれば、とりこげ厚くこれを待し、處がらの美酒、稻水の香魚なをを、日々進めて、その旅懐を慰めたり。麴麿一夜爛醉して、諸人と共に郭外を散策し、昆陽の池の畔に到れば、一痕の素月、水面に印して光彩瑩然たり。麴麿輿に乗じて、あはれ水中の月美しき哉の望むべくして、即くべからず。いで我こそは、これを捉るべけれ。といひて、やがて衣を脱ぎすて、忽ち水に躍り入りぬ。諸人あなやと思へど、留めん由もなし。少時ありても、麴麿は浮びいでず。諸人皆麴麿の身の上を危みて、人を倩ひ、探りて抱き擧げさせつるに、下腹を抗に打たせて、息も絶々なり。皆々いたく驚き、醫を迎へて、治療せしめしかど、その効もなう、空しく逝きぬ。良臣泣きて



その戸を收め、後事を經紀する事、いと懇ろなりき。さて、残されたるは十歳あまりの兄瓶にこそ。子然として、倚るべき處なし。良臣これをも能く視て、携へて和歌山に赴き、藤垣内翁に託しぬ。翁一見して、兄瓶の才を愛し、快くこれを諾し、家に留めて學ばしめたり。兄瓶後に紀藩の醫員加納伊竹に養はれ、遂に加納氏を冒し名を諸平と更めつ。當時、詞苑に石川依平、近藤芳樹等と共に、二平一樹とうたはれたりしは、即ち斯人なり。

(五) 近藤芳樹……加納諸平……村田春門

◎寄居主人芳樹、長州よりはるくくと、良臣を伊丹に音づれぬ。良臣勸めて、藤垣内の門に遊ばせんとし、強ひて強情なる芳樹を伴ひ

て、和歌山に到り、大平翁に謁せしめて、塾中に學ぶことゝなれり。芳樹ある日、同門の諸平等諸子と明光浦へ遊び之き、醉中くさくさの物語せしなべに、一人が芳樹にむかひ、君は、先生の養嗣と定まれる由、流石にかく様が着せらるゝ蒲團まで、かいなでの物にあらぬこそ、その證據なれ。いと悦ばしきことならずや。といふに、芳樹は、佛然として、我何を苦みてか、父母の家を去つて、他の氏を冒すべき。男子自立すること能はずんば、恥これより大なるはなけん。諸平の如きは、名家の後たるに、却て他家の養子となれるこそ、陋の甚だしきものといふべけれ。とて、是より、論鋒を諸平に向げて、頻りに養子たるの陋を論辯せり。諸平黙して、これを聴き

十  
おたるが、何時の間にか影だに見えすなれり。諸人その先づ歸りし  
ならんと思ひ、和歌山に歸りて、加納家を尋ねつるに、未だ歸らず  
。といふ。是必ず芳樹の論難に激せしならんとして、諸人こもく芳  
樹を責む。奇矯なる芳樹も、今は太く困却しけるに、噂は、早くも  
大平翁に聞ひて、翁も養子の身として、心よからずやありけん、稍氣  
色ばみて、諸平を捜して、伴ひ歸るべしとの命は、芳樹の頭上に下  
りぬ。芳樹思ふに、彼必ず遠州の故郷へ歸らんすらんとて、師命の  
戻り難ければ、旅装して、即座に出立ち、終夜歩行して、拂曉に大  
阪に着きぬ。當時浪華の詞林に、歸然と存じて、魯の靈光殿たりし  
は、村田春門なり。若しやとて、芳樹が、これを訪へば、果して諸

平は、春門と爐を擁して語らへり。芳樹は、打喜びて、事云々と語  
り、師翁の意をも告げて、歸るべし、と勸むれば、諸平は、深く芳  
樹の前説に服したれば、故郷の念、留むべくもあらぬをいひて、動  
かず。遂に春門の諭しを得て、諸平は、芳樹に伴はれ歸るべき様に  
なり、二人は、前夜片時も睡らざりしにも拘らず、師なる人の待た  
んを思ひて、その儘引き返し、辛うじて、夕暮に、泉州貝塚の宿に  
つさぬ。二人相謀り、眠たさを忍び、勉めて一夜百首を詠み出で、  
師に乞ひんやすがとす。やうくに詠み了へて、これを淨寫し、枕  
に就けば、聴き慣れぬ鏝々の音、隣房より傳はり來ぬ。紙門の隙間  
より、潜に窺へば、音は、一商人の臥せる傍の風呂敷包に在り。二

人深く怪みながら、翌朝起き出で、歩みて和歌山に歸り、本居家に詣れば、昨夜怪みし鏘々の音、茲にも起れり。二人益す怪み、大平に謁して、先づ奇音について夜來の怪みを告げ、更に一夜百首の歌稿を出しぬ。大平いたく二人の精力過絶なるを賞し、又も談は、奇しき音に移りて、二人は、幸ひに甚だしき叱責を蒙らざりき。この奇しき音は、即ちあるごうるなり。當時始めて船載せしを、大阪の商人が携へて、紀に到り、本居家に致し、二人は、その途上、それと同宿して聽きしなり。二弟子が、奇音の爲ふ、師の怒を緩うせられけるこそ、いとも奇なりとは、いふべけれ。

墨のめをり

(一) 小序

關西にして、臨池家とはいはれ、誰かは、先づ指を村田海石翁に屈せざらん。翁の義嗣山陰は、予と舊識あり。やがて山陰を介して、翁の隠居の處たる廣小路町の居を驚しつ。翁欣然として、出で迎へ、予をその養素齋に延かれぬ。壁間には、壺の石文の榻本一幅を掛け、その傍には、古法帖を積み重ねて堆く、古墨の清芬、人を撲つめり。翁の座側なる煙盤に添へたる火箸が、「三體純羊毫、廉文竹」と刻める廢筆管に挿れたるを見ても、書家の居たるを失はず。翁近來緩風に煩ひ、指頭さへ既にいさゝか麻痺を感じて、搦管自由なら

す。この故に、門を杜ち、客を謝して、筆研を外にし、優游自適して、病痾を養へり。されど、快談縦横、予をして、知らず、識らず、翠光冷色の中に入らしめたり。その談せしを次第すれば、左の如し

(二二) 村田海石の生立……正月堂

◎翁、名は壽、字は樂山、海石はその號なり。通稱を浩藏といふに、因みて、別に室に命けて、養素齋といへり。もと立賣堀西之町の材木問屋鹽飽屋の若檀那にして、平生材木の良否を鑒別し、牙籌を握りて、錙銖の利を拆てり。されど、幼より入木の道に志厚く當時、提燈屋にして、寺子屋を兼ねたる正月堂に師事し、運筆の法を

授れり。正月堂は、寺井養拙に依樣して、運筆尤も奇僻なれど、席書大文字の流行せる折柄とて、この流ならでは世に容れられざりしなり。翁この門に在りて、出藍の譽れありき。

◎翁の壯なるに及びて、不虞の災厄に遭遇し、一家忽ち退轉して、剩へ、雙親を喪ひ、夫妻糊口の資に、事缺くに至りぬ。翁の素志は、書家をもて家を成さんとにあらす。功名の途に奔走して、一事業をなさばや思ひかけしなり。されど、事と志と違ひて、一家の危急、此の如きに及びければ、遂には、人の勸むるまに、志を枉げて、寺子屋をぞ始めける。これを、翁が筆札にて、衣食せしはじめとす。

◎この時、菱湖の法帖一冊を得て、披觀一過し、肅然と敬を起し、往いて之に従ひ、その書法を受けんと欲す。人に就いて、問へば、菱湖歿して、已に久しく、その衣鉢を傳へたるもの、大竹蔣塘、牧野天嶺、萩原秋巖、中澤雪城等の諸名家存せり。といひぬ。是より先、雪城が京攝の間に往來し、豪放の氣を以て淋漓の墨汁を揮灑せし事のありしをも、人より傳聞したれば、遂に、雪城に従遊せんと思ひ立ちぬ。翁時に年三十四五。

(三三) 海石……中澤雪城

◎翁、一士人に従ひて、江戸に趣き、その道の人に雪城の動定を問へば、數日前既に長逝せり。といひぬ。(翁は、景仰の深き、猶これ

を信せず。直ちに馳せて、藥研堀なる雪城の宅を敲き、刺を通じ、來意を告げ、養子雪塘に逢ひて、始めて、雪城の長逝の處ならざるを知り、悼惜措く能はず。尙、此日は、七日の忌辰に當れり、と聞きしかば悲しや、土宜に代へて、懷にせる封金の表を書きかへ、香奠として、靈前に供しぬ。更に雪塘に従はんと請ひしかど、雪塘は己人の師表たるべき才にあらず。とて許さざりしかば、詮方なくも、中澤家を辭し去りき。(雪城の歿せしは、慶應二年二月朔日なりしかば、海石翁が訪ひしは、恰もその月七日なりしならんか。)

(四) 海石……萩原秋巖……卷鷗洲

◎翁は、かねて景慕したる雪城の失せられたれば、今は、誰にか従はん

といたく、落膽しけるを、さる人の勸めて、萩原秋巖こそ、菱門の  
 高足にして、書論筆蹟ともに勝れたれば、從遊せんは、斯人こそよ  
 けれ、といひぬ。翁こゝに思ふやう、卷家の書法を授らんには、均  
 しくまれば衣鉢を傳へたる人なれば、いかで、中澤先生と萩原先生と  
 を擇ばん、とて、遂に、秋巖の門に遊ばんと思ひ立ちぬ。大橋訥庵  
 の嗣子照二が、翁の知る人なりければ、これに倚りて、紹介書を得  
 、始めて、贅を執りて、秋巖の門に入りぬ。

◎秋巖は、子弟を教ふることを、嚴酷にして、その室はた饒舌なりし  
 かば、門生久しきに堪ふる能はず、多くは數月にして、辭し去る。  
 菱湖の遺子鷗洲が憤怨の餘、酒を被り、大刀を抜き、二階梯子を

斬りつけ、飄然として、去りしは、この時にして、恰も翁と同塾せ  
 しなり。翁外出して、前の同門の子弟に遇へば、彼輒ちいふ、猶  
 褊狭なる萩原先生の塾にありや。流石に上方もの、卑陋なる本性に  
 こそなぞ、調ひしかど、翁は、少しも顧みるところなく、愚と呼び  
 陋といふに任せて、獨り自ら刻苦勉勵すること、一年にして、得  
 る所ありしかば、師門を辭して、浪華に歸りき。

(五) 海石と小學習字本を

◎翁は、是より、糊口の資にもし、且は細楷の練習にもせんとて、  
 鹿兒島縣の出版に係る書籍の書版をなしたり。その名聲藉甚、今日  
 の如きに至りしは、大阪府の囑を受けて、小學習字本を揮灑せしこ

と、その端緒なりしか。爾後、鳴鶴、三洲、三橋等諸名家の小學習字本の印行ありしかど、その教科用たるは、僅に一府一縣に止まりて、廣くは、用ゐられざりしが、ひとり翁のは、唯大阪府管内に翹翔するのみならず、翼を延いて、殆んど全國に徧からんとす。かくて、諸名家のは、やうくは、跡を歛むるに至れり。いとも盛りなりと謂ひつべし。

◎翁常にいふ、自分は、菱湖の末流を汲みて、幸ひに、今日あるを致したれば、巻先生の遺徳に感ずること深く、將又秋巖先生を忘れんや、といへり。(翁は、余に對ひて、こゝ一兩年は、習字本書くのを許して、戴きたい、が習字本で苦勞する時間よりも、好い法帖に

就いて、手習する間が多いのを見て下さい、習字本書くのは、子孫の計をする爲です、その計さへ立たば、斷じて書させぬ、その上で、書らししものを見て戴きたい、と云ひまの。)

(二六) 中澤雪城……力士不知火

◎雪城は、その筆蹟の流麗なるに似ず、天資豪放にして、いたく、角觥を好み、獲たる潤筆錢は、皆これが爲に抛擲して、慳む所なかりき。殊に力人不知火を愛し、その化粧まはし、配り手拭などの字入れまでも、大抵雪城の筆になれり。雪城が薬研堀の借宅、甚だ宏敞にして、貧書家の住むべきにあらず、家の大なるが爲に、生計上に又一の困難を生じたるを、雪城が磊落たる襟懷、少も顧慮する所

あらざりしが、不知火密にこれを聞き、平生の恩顧に報いんの心にて、その宅の門長屋めける一室を、事に託して、借り受け、己が弟子力人二三人を起臥せしめ、邸内の掃除人とし、若干の家賃を中澤家にはかりて、陰ながら、此家の活計を補助しむたり。翁の雪城を訪ひしときには、不知火の標札の小ささが、門の柱の左に懸れり。猶雪城が浪華に豪華の遊をなし、折、落籍せしめて、妻となしたる南地全盛の校書某も、當時は、花殘柳老のさびしき風情にて、空しく離鶯別鳳の嘆きに沈みてありき。

(七) 卷菱湖……萩原秋巖

◎秋巖初め市河米庵に従遊せり。菱湖の名稱揚るに及びて、筆工の

弘齋(菱湖の別號)何程の書論をかなし得る、とて、試みに菱湖を訪ひて、議論を上下し、始めてその書法の精妙に推服し、翻つて弟子の禮を執りて、これに従ひぬ。これに因りて、書を本國飛驒に飛し、師家を換へつるもる由をいひやりしに、當時、菱湖の聲譽、未だ徧からざりしかば、家なる父は、その名だに知らず、一意に秋巖が遊蕩の爲、米庵に破門せられ、詮方なく、かゝる言を設けて、いひおこせつるならん、とて。太く打腹立ち、遂に學資を送らずなれり。秋巖大に窘みて、これを菱湖に告げしに、菱湖は、笑ひて、貧厨ながら、猶汝に食せしむるには足るべし、といひき。秋巖感激し、是より、蕭遠堂に内弟子となり、臨摹の暇、頻りに書版をなして、



業とせり。かの館柳灣が鈔録したる佩文齋詠物詩選の淨寫は、秋巖の筆にて、この時に成りしものなり。菱湖が秋巖の爲に、窮を訴へて、その版下料を請求せし書牘を藏せる人あり、と翁はいへり。中根翁の香亭雅談には、柳灣が菱湖に詠物詩選の字を寫さしめて、其値毎葉二方金なりし由を記せり。何れが是なるにか。

檜の陰

(一) 小序……行徳玉江

◎浪華における風流界の故老として、行徳玉江翁を訪ひつ。翁年七十二にして、猶健やかなり。近來脚疾を患へて、但行歩に便ならず。されど、疊々として、談じて少しも倦まず。

◎翁、學を篠崎小竹に、詩を廣瀬旭莊に、畫法を鼎金城に、篆刻を吳北渚に受けて、各得る所あり。旭莊の梅墩詩鈔第四篇に、しばく見わたる行檜園、玉江畫史等は、皆翁の別號なり。

◎翁もと玉江橋南詰東へ入りたる處に住めり。庭に一樹の老檜ありたれば、檜園を號とせり。その後旭莊が、好橋名、徒に看過すべか

らず、といひしより、翁遂に玉江を號とせり。

（三） 玉江……今枝夢梅……鼎金城……貫名海屋

◎翁醫家に生れて、書を好めり。少き時、京に入り、儒醫今枝夢梅（讓助）に刀圭の術を學ぶこと四年なりき。夢梅餘事として、丹青を好み、寸暇あれば、毫を舐め、楮に臨みぬ。翁いつもその顔料とを命せられたり。素より好める處へ、かゝる襪染ありしかば、遂に畫史たらんの念も起りしなり。

◎某の畫譜を撫し、某の粉本を摹しつゝ、頗りに、無聲詩に心をこめたる翁は、猶師事する人もあらざりしが、某の宅にて、始めて金城に遇ひ、その畫論を傾聴し、そがいふに任せて、平生臨寫せる所

を示し、に、金城一見して、之子教ふべし、とて、是より、或は臨本を興へて、口筆共に授け、或は貯藏の粉本を貸して、専ら翁を奨勵せり。

◎翁の醫業、行れざるにあらざりしかど、書を好むの厚き、それに専らなる能はざりき。翁の叔父、翁を誡めて、孰れか一途に専心せよ、といひしかば、翁斷然と藥匙を擲ちて、繪事にのみ勤め、克く鼎家の衣鉢を奉じて、造詣漸う深うあれり。その後、しばく旭莊に陪うて、山陰山陽を歴遊し、丹青一枝の筆を揮霍したりき。

◎當時、京師にて、貫名海屋が書畫雙絶の名聲藉々たり。翁數その門に出入し、益を受くること少からざりき。海屋嘗ていひしに、

筆尖一たび墨藩を浸して、揮灑するに、黒濁るゝに至らば、再び浸すべからず、書畫共に然り。といひしかば、翁は、今にこの教を奉せり。

(三) 彌僧鐵翁

◎長崎の畫僧鐵翁、貧寺に住持たり。性疎懶にして四方より來囑せる絹紙は束閣して、輒く揮灑せず。書畫周旋屋某、冬日に畫の催促かたぐ、鐵翁を訪ひつるに、鐵翁蕭然と火なき爐邊に兀坐袖手して唯寒しくと呖さるたり。某小才あり。疾く鐵翁の弱點を看破し、近頃買ひたる良炭あれば、これをもて、聊か和尚の寒を解かん、とて直ちに寺僕に命じて、自家の炭一俵を取り來らしめ、これを火

にして火鉢に堆きまで盛りて、鐵翁に進めつ。鐵翁喜氣眉宇に溢れ、火に對すること、一時ばかりにして、忽ち大呼し、暖正に融れり、畫なかるべからず、とて、即て練素を展べ、縦横揮灑して、某に與へ、筆を投じて、一俵の炭と我が畫と相換ふ、我が損する所、甚だ大なり、又しても黠奴にはかられたり、とて啞啞大笑せり。是も玉江翁が客遊中の見聞に係る。

(四) 鼎金城の小傳……廣瀬旭莊

◎墨をおもにしたる岡田半江、筆をひねとしたる金子雪操、この兩家に學びて、巧みにその長處を調和して、能く一家を成したる金城は、一生輾轉不遇なりしなり。その生れしは、文化辛米の春にして

父春嶽は、その秋に歿し、母また多年ならずして、世を逝りしかば、父の門人秦黄山これを保字して、漸く繪事を教へしが、黄山も歿し、尋いで大鹽後素の亂ありて、秦氏が天満六丁目の宅、災に罹りぬ。金城は、また寄るべを失ひて、秦氏の姻戚なる福島戸田氏（大和屋平作）に寄寓し、半江、雪操に前後師事して、遂に當時浪華の丹青界に一旗幟を樹たりき。

◎金城人となり温藉沈黙にして、利塵名埃に染みざりしかば、その畫詩ともに、清瑩洒脫なり。詩は、旭莊に就いて、學びしが、その稿多くは、散佚せり。明治二十年の春、その二十五年の忌辰に當りぬれば、門人故舊相謀りて、祭事を修し、門人たる玉江翁は、遺詩

一百首を収録して、これを活刷に附し、靈前に供したり。金城遺稿即ち是なり。

◎金城嘗て同門の士と、旭莊の宅に會せり。談たけなはにして、旭莊は、各得意の事を語らん、といひぬ。藤井藍田その聲に應じて、僕は最も才子を愛すといへば、旭莊笑ひて、子が所謂才子とは、妻子からずや、とて、一座哄然たり。かくて、諸子皆いふ所ありしが、最後に、金城は、徐るに、僕は、未だ曾て自ら知りつゝ、小悪事だも犯し、ことなし、といひき。この一語こそ、洵に金城の一生を想見するに足るなれ。

◎藍田は、綿屋卯右衛門と稱して、本町（宅は泉由次郎氏が舊居の一隅とぞ聞ゆし）の呉服商なりき。資性慷慨にして、勤王の志厚く、元治慶應の際、一身を擲つて、國事に奔走し、長藩の爲に竭力せしかば、終に壬生浪士に捕へられ、幕吏が拷掠の下に斃れき。時に慶應元年乙丑閏五月十五日にして、享年五十二とぞ聞ゆし。その親友伊勢小湊（舊名北條瀬平）が藍田を弔ひて、

遺事何須説太明。毎聞遺事淚雙傾。唯欣一片風流骨。義烈傳中應著名。

と吟せしが、實にや、彼の義烈は、竟に朽ちず、九段阪上の靖國神社に合記の恩典を得たり。布衣の榮といふべし。

◎一片の風流骨を具したる藍田は、才子を愛すといひしだけ、己も亦、落々たる風懷の小杜を期せしか。嘗て、白牡丹詞を作り、八重橋勾當に囑して、譜を調せしめ、その「うたびらさの」宴を新町の青樓京豊に張り、當時の名流數十家を招請せり。樓上の紙門、皆蜂蝶戀香の圖にして、此宴の爲に、諸名家の筆を揮ひたるもの、行酒美人も盡く蝴蝶を染め出したる華麗の新衣を著け、諸名流の携へ來れる藻葩、はた盡く蜂蝶戀香に題せるものなり。實に一時の盛を極めしかば、この家をも、遂には、蜂蝶戀香樓と號するに至れり。その詞にいはく、

年を経て忘れしものを今更に人の噂にそゝのかされて又も身にし

春の風フツと薫れる花の香は一ねん香ぢやないかいな  
同門の柴秋村が藍田に贈りし詩に、

禪、楊茶煙春又殘、一簾疎雨綠陰寒、多年刪盡繁華夢、猶有人傳白牡丹、

とあり。その秋村の墓木も、既に拱せり。今日猶白牡丹詞を記せるは、それ白髮種々たる玉江翁あるのみか。あはれ。

### 松堂閒話

(一) 小序……山田松堂……藤澤東咳……森田節齋……無絃女史

◎松堂とは、儒醫山田連翁が讀書の處あり。翁少にして、藤澤東咳、森田節齋の二家に從游し、殊に詩文に堪能なり。刀圭の餘暇、文會吟筵に参りて、清幽超遠の才を馳聘し、いとも名聲あり。予一夕、翁の令婿雲濤と共に、翁を訪ひぬ。翁温顔予等に接し、その經歷談、口を衝いて出で、殆んど予等に、夜のふくるをも覺ゆざらしめ

◎東咳節齋二老、最も相親善せり。彼の無絃女史(高槻藩士小倉某の女琴子)を節齋に媒せしは、東咳なりき。その時、節齋詩あり、

廿歳耽文、文益奇、苦心唯有咳翁知、密言門下孟光女、除却吾儂欲嫁誰、

女史これを和して、

海内文章今屬誰、詞場盡稱節翁奇、先生若許執箕箒、半作良人半作師、

といひ、琴瑟和諧したりしが、傭中倉敷に在りし日、一言の失より、竟に破鏡の嘆を賦するに至りき。

(三二)

簡塾……柴原靖廬……福永古香……松堂……無絃  
女史の破鏡……破鏡再照

◎節齋の塾を簡塾といふ。これが塾長たる柴原順二(名は和、號は靖廬、現に貴族院議員に班せり)は、自ら塾則を作りて、自らこれ

を犯し、かば、節齋怒りて、直ちにこれを破門せり。されど柴原は、節齋を景慕して、他に師を求むる意なく、必ず改悛の實を見せて破門を赦され、再び絳帳の下に侍せんことを、同塾の士福永得三(號は古香)と松堂翁との二人に依りて、哀請す。二人深くその情を察し、やがて、節齋の書齋に入り、事情を告げて、柴原の爲に請ふ所あり。節齋は、平居仰臥して、交を思へり。此時も、臥しながら「ウン、柴原か、彼奴は、悪い奴チヤ……好し赦してやる」との一言にて、忽ち破門はゆりぬ。二人は、事の意外に容易なりしを打悦びつゝ、更に無絃女史の室へ、縁づたひに往けば、女史は、これを察してか、忽ち障子を閉ぢつ。二人已むことを得ず障子の外より、柴

原が破門の有りたるを告げ、猶それに代りて謝せしに、女史は、厲聲して、「巧言令色鮮やかな仁、是は、柴原さんの事です、縦令節齋が赦しても、此琴が承知でござませぬ、強ひてとならば、此琴を離縁して、貰ひませう」。かくいひし後は、二人が幾度言を費しても、聞として、應ふる者なし。二人は、詮方なく、再び節齋の書齋に詣り、云々と告げぬ。節齋は、即座に、「牝鶏晨するナ」といへば、二人も、「左様で御座ります何も牝鶏が晨しますので」と畏まりぬ。節齋は、少し考へて、「離縁してくれといふか、それでは、離縁して遣る、直籠屋を呼びに遣れ」と命じつ。

◎二人簡塾に歸りて、此事をもて、柴原に語れば、柴原は、欣然たり

○傍聴せる同塾生の面々も、豫て無絃女史の傲慢を憎みられたれば、塾擧りて、「細君を去るとも、塾生を愛す、流石は、節翁の節翁たる所ぢやと、頻りに節齋の徳をたふふると共に無絃女史を貶して、その去らるゝを喜ぶ。籠屋は來ぬ。塾の世話人大阪屋源助も喚ばれて來り、打驚いて、女史の爲に救解しつれど、節齋竟に聴かざれば、せんすべもなく、女史を伴うて、おのが家に引き取りぬ。わはれや、覆水は、盆に還らざりけり。

◎節齋と松堂翁の令椿山東君(名は文英)とは、その交情、雷陳も雷ならずりき。山東君は、無絃女史が節齋に棄てられしを聞きて、太く兩家の爲に惜み、二人の子女さへ擧げたるにとて、懇々節齋に説



さ、更に無絃女史をして、往日の失言を謝せしめ、こゝに再び無絃の琴に、絃を續ぐことを得たり。是なん、離縁の後、五年経て、節齋の紀州に索居せる時なりし。

(三三) 古六新六の争……節齋の終焉

◎備中倉敷には、その頃、古六、新六とて、新舊の素封家六戸づゝありて、相反目し、互ひに刀背稜を削りあひたり。大橋敬之助といふ小才子、新古兩派の間に往來しながら、時としては、簡塾の講帷に侍することもありけるより、遂には、節齋さへも蝸角蠻觸の争渦中に彷徨せしめられんとしたり。門人故舊これを危み、密に節齋を作州へ落しゝが、その後、山東君及び林雨谿（林龍太郎氏の令曾祖

父）の二人が、紀州に伴ひ歸りしなり。

◎節齋終焉の地は、紀州那賀郡荒見村の愚中庵なり。此地の高貴戸北長左衛門氏（松堂翁の親戚）萬般の事をまかなひしが、節齋は、豪放自適して、少しも檢束する所なかりき。

(四) 森田節齋……吉田松蔭……奥野小山……相馬九方

◎節齋曾て門人吉田松蔭を廻へて、泉の岸和田に到り、旅亭竹川屋に投宿せり。藩儒相馬九方來り訪ひ、文稿を出して、正を請ひぬ。節齋一見して「是では、文章にならぬ、なう吉田」といひつゝ、松蔭に示せば、松蔭も「さよですなア」といひて再び手に把らず。九方更に新年の詩草を出しつ。その中に、泣君恩の語あり。節齋即時戯

れに高吟して曰く「槍を建て、色誇る奥小山、講に侍して口訥す藤東咳、獨り相翁の其選を異にするありて元日の雜糞君恩に泣く」とて、又狂歌を詠す。

鬼神を泣かしむ文に泣かずして

雜糞を食うてなせに泣くぞや

と朗誦して、啞々大嘆す。當時、小山は、參政三上侯の儒臣となりて、最も得意の折なりしかば、かくは調れしなり。小山は、常に節齋に兄事して、一文成れば、必ず郵致して、雌黄を請へり。九方も是より節齋に心折して、文は、必ずこれに就て正しき。

(二) 節齋及びその門下の古文背誦

◎節齋、文を講ずるに、書を見ず。先づ一門生にその文を背誦せしめ、自らは、小段落に到れば、一撃柝、大段落には、太鼓を鳴らし、これを警む。抑揚頓挫、はた自らそれくの讀方ありて、會心の古文、殊に文章軌範の如きは、都て背誦して、一字を愆らざりき。先生既に此の如くなれば門下の弟子、競うて背誦を事とせり。この故に、松堂翁も今猶唐宋の雄篇大作を琅々背誦して、強記自ら詔れる少壯の輩を壓倒しつるは、また能く先師の衣鉢を傳へたりとぞいはまし。

碧山艸堂

(一) 小序

◎一局樗蒲、韋應物、十年花柳、杜樊川、と自家の小照に題して、自ら嘲りし日柳柳東先生の嗣なる三舟翁を桃谷の居に訪ひぬ。翁解官の後、吟築をこの小桃源に卜し、顔して、碧山艸堂といひ、文詩書畫に優游し、風流自ら娛めり。而して、翁の閱歴を繹ぬれば、柳東と共に甚だ多し。

(二) 日柳三舟の幼時……稗史家荒川栗園

◎翁が幼時、孝經の句讀を授かりし師を荒川栗園(名は政、通稱は齋)といふ。舊琴平神社に客臣たり。性狷介にして、世に容れられ

ず、常に雙刀を帯び、睡毗の怨、必ず報ゆの風あり。尤も國史の學に長じ、諸家の系譜より、三百諸侯の徽號に至るまで、一々暗記せざるはなく、又能く談鋒四座を驚殺しつれば、遂に俗吏に忌憚せられて、俱に齒するものなきに至りぬ。栗園飄然と此を去り、遠く隱岐に遊び、島民に教授して、生をなし、が、後浪華に客寓し、木村華翁に倚り、小説を著して自ら給せり。今猶坊間に行はれたる岩見武勇傳は、その繡像を併せて、栗園の一手に成りしなり。又蒙古掃蕩録を著すに當り、稿半にして、病に煩ひ、終に歸國して歿しき。その稿本は翁の家に存せり。柳東が栗園を哭する五絶中に、  
翫麟平生與俗疎、客中病苦定何如、歸來囊底餘何物、一部稗官未

刻書

とあるは、掃蕩録を指し、なり。あはれ、栗園は近世の一奇士なるかな。

(三) 日柳柳東……高杉東行

◎柳東家道甚だ饒なりしが、性豪放にして、客を好み、游歴の徒は文武を論せず、款留して、交歓せしかば、これが爲に、産漸く傾けり。されど少しも顧みず、かの韋蘇州の裏面を學びて、客を養ふ資となし、木戸松菊、高杉東行一公の如きも、柳東が奇偶聲裏に寄食せしなり。當時、東行は、紅屋喜兵衛と假稱し、もと馬關の妓たりし宇野子（梅處尼とて現存せり）を妾として、挈へたり。翁の手匣

の内には、東行の手帳を藏せり。表紙に、天日海と大書し、乙元治二年、巳四月吉日を左右に細書し、裏には、邊仁喜と記せり。最初五六葉は、梅處尼が記したる酒肴などの代價にして、その外は、皆東行が詩文の草稿なり。柳東のゆくりなくも、捕はれて、高松の獄に、四年の間、呻吟せしも、全く是等の志士を隠匿して、國事に奔走せしに因れり。

(四) 河野鐵兜……野口松陽……宗像重閣

◎「あれでまわ先生様か雲の峰」とは、柳東が赤條條の河野鐵兜を見て、調ふれたる雑俳なり。一讀して、二家の交態も知れ、鐵兜の磊落たる性行も知らるべし。この緣故にて、翁の弱冠の時、西征の

途次、父執なる鐵兜の門を叩き、その林田塾に留まること一月なりき。その頃、鐵兜手づから漁洋の精華録中より、會心の絶句を鈔録して、常にこれを誦し、又深く青邱に心折せり。故に、その作、清瑩靈秀、時選に異り。當時、塾中に在りし野口知一(松陽)片野良藏、八木郁二(仙帆)山田浩吉、八木敏馬、芳村謙助(正乘)等、維新の後、各才學をもて、世に立ちしが、今は早凋謝せしもあり。就中、松陽は、未だ弱冠ならずして、二十一史に精通し、頗る才名ありき。翁當時これに贈りし詩に『人似鐵鋒字、文如出水蓮』の一聯ありしが、松陽の後年懷人詩三十韵を作りし末にも『獨思南海柳秋帆』の句あり。秋帆は、翁の別號なり。

◎林田塾の支關番をなして、禮太々々と呼捨にせられし宗像蘆屋の孤兒は、今臨池に於て、一家をなしたる雲閣居士なり。

(五) 鐵兜……柳東……三舟

◎鐵兜、柳東は、その交、莫逆にして、その居、海を隔つれど、常に相往來せり。翁少時、その談論に侍りしかば、薰染尤も深く、氣魄は、尊甫柳東より傳へられ、多能は、父執鐵兜より獲たるなるべし。鐵兜始めて翁を見しとき、左記の詩を示して、獎勵せり。鐵兜の後生を導く、此の如し。翁、人に向うて、これを説く毎に、悽愴として、追懷の情に堪へざるが如きも、宜なるかな。

不願噪如雀、不願俟如鶯、不願山雞照影、不願家鴨呼名、只願桐

花、萬里丹山路、雛鳳清於老鳳聲、

五十

(六) 附 載……三舟の手簡……野口寧齋の手簡

余、三舟翁を訪ひし後、翁は、懇に手簡をおこせられて、雅談の遺を補はれしかば、こゝに載することとはなしつ。千秋識す。

拜啓過日は久々振にて拜晤平昔萬斛の渴塵頓に一掃仕ひ其節の話緒百端前後失序猶遺漏も有之いへば重て申上い

小生幼年書を學びたる師を合葉文山といふ名は素別に蝶叟と號せり喜びて蝶を畫くを以て也信州飯田の人、谷文晁の高足にして竹田にも學び畫趣巧緻六法整正今時多く見る能はず惜哉僻地に老いたれば世人知るもの少し

次は須本蒞洲日向の人別に北湖と號す畫致高雅竹田と伯仲の間に在り是も小生の國に歿す遺墨猶世に存せり

次に美馬君田名諸稱援造別に櫻水と號す阿波人來て讚に寓す小生就て漢籍書畫を學ぶ後國事に關し亡父と共に幽囚四年なり

小生鐵兜翁の易箆を聞き客游中弔詞拙作因に申上い

古鐵瓶乾破扇風。病中佳句跡將空。詩書今代真無敵。花月當年不負公。四座客曾欽北海。一爐香只拜南豐。舉杯何日醉消渴。秋雨茂陵苔色籠。

翁患消渴以歿、病中有句云、古鐵瓶乾破扇風、烏薪有響七分紅、起句故及、

余が友人にして、松陽翁の令嗣たる野口寧齋より、余が僚友原田夢  
龍に寄せたる手簡あり。その事、碧山艸堂に關係あれば、こゝに、  
抄録しつ。

千秋識す

前略廿日の月曜附録秋渚君の碧山艸堂文中聊か家父に及び候事有  
之候に付一二思ひ出し候儘申上候同君へ御傳へ被下度候同君には  
久しく御無沙汰致し居候間宜敷御致聲可被下候

家父が懷人詩を作りしは文久壬戌の七月林田新塾にて病中の口占  
に有之候由されば三舟翁と交を結びてより程なき事かとも思はれ  
候如何に哉同君の記されたる「後年」といへる文字は如何様にも解  
釋せらるべしとは存じ候へ共遙の後の様にも取られ候に付一寸申

上置候

懷人詩は都合三十首にて一東より十五咸迄次第致され翁の分は最  
後にて

樓臺箇箇倚雲崑。金碧炫天斜照銜。書寫山奇情誰寫。座無南海柳

秋帆。日柳終吉

と有之候「獨思」の二字は流傳の誤かと存じ候此外「象山絶句似柳  
終吉」と申すもの五首有之其末首には

寫出金陵花月情。新詞艷說乃翁名。一般才筆傳奇手。雛鳳何如  
老鳳聲。

と推賞致し居候想像致し候所によれば翁と家父とは年頃餘り相違

致し居らず從て御懇意を深くし候に哉如何あらんと存じ候

『人似藏鋒字。文如出水蓮』の一聯は始て拜承致し候家父は一度四國へも渡海致し翁父子の厄介になり候事も有之候へ共柳東翁の分は家父「阿讚紀行」の後に題する七絶一首（白紙小切）と書畫帖一葉夫に詩稿の總評一行ばかりのもの御認めあるのみにて三舟翁の分は同じ書畫帖に「風雨訪友圖」と申すもの一つ有之候のみに御座候翁とは縁なくして御文通も致居不申候に付あはれ御序の節右一聯の全詩御聞取被下候て更に御教示被下候事を得ば幸甚の至に御座候

### 清來山房

(一) 小序

◎浪華の丹青界において、傅彩の妙手は、上田耕冲翁を推さざるを得ず。翁今年八十一の高齡に躋り、曼澤怡面、氣力猶壯にして、目夕繪事に從へり。余がその道修町五丁目の清來山房を叩きし時は、翁方に藝棚に對ひ、花王彩鶏の圖を寫して、半ば成れり。やがて、筆を停めて、少壯の昔を談じぬ。

(二) 上田耕冲……上田耕夫……長山孔寅

◎翁の先人は、應學十哲の一なる上田耕夫なり。耕夫は、池田北の口の豪農にして、氏を阪上といひしを、同地に同氏多くして、萬に



錯り易さを厭ひ、山田の最も上なるが、豊稔の折から、その紀念として、氏を上田と更めつるなり。耕夫少うして畫を好み、一枝の筆に志を立てんとし、京に入りて、圓山の門に遊び、終に能く一家をなしとなり。文學の志はた厚くて、皆川淇園、村瀬栲亭、上田餘齋等、殊に交歡せり。室に匾して、清來山房といふは、淇園が清風徐來の句に據りて命けしなり。

◎翁は、先人の六十歳の時、京に生れて、自家の十三歳の時、此地にて先人を喪びき。翁既に孤となりぬれど、粉本堆裏より呱呱の聲を發せし者として、夙より遺傳の存すれば、豪商平野屋五兵衛之を愛撫して、父執なる長山孔寅に従遊せしめつ。孔寅は、景文門下の

巨擘にして、當時八秩の老畫師なりき。

（三三） 上田公長……田中秋亭

◎孔寅の門に、上田公長あり。稻荷座の太夫の子にして、畫に巧者なりしかば、見臺を疎んじて、顔色礫に親み、高麗橋の裁縫師松本觀山（桔梗屋）の丹青に堪能なるに倚りて、刻苦勉勵し、裾模様なを描きおたりしが、何とかして、世に出でんものと思ひ立ち、遂には、長山に入門したり。その業成るに及びては、深く素性を包み、又人に知慧づけられて、心ならずも、自ら吳春、景文に親炙せりと稱して、門戸を張れり。その手腕既に健なれば、絹紙四面より來囑し、弟子はた大に進みき。室家某子能く家を治め、公長をして、繪事

に専心せしめたり。公長の此に至りしは、實に内助の力多きにをり  
とぞ。

◎田中秋亭は、公長の門人にして、尤も能く衣鉢を傳へたるものな  
り。さるに、その畫、盛んに售れざりしかば、秋亭決然として、筆  
を擲ち、頭を圓くして、南地の花柳に身を投じ、幫間となりぬ。その  
父勸次は、南地にて、有名なる幫間なりしによれり。同門輩々と、  
これを咎めつれど、秋亭灑然として顧みず。公長太く怒りて、これ  
を卑屈とし、破門しつ。或る人いはく、幫間の子が幫間になるのは、  
當りまへぢや、淨瑠璃語りの子が、先生になつたとて、さう眞面  
目くさつて、開けぬことをいふに及ばぬ。

(四) 森狙仙……周峰……雄仙……徹山

◎畫猿の名著を森狙仙の兄を周峰といふ。眼に一丁字なかりき。  
一日、他より使して、紙片に題を書し、畫を需むるものありけり。  
周峰やがて幼女に讀ましむれば、せんとりと讀みぬ。周峰眉を蹙め  
て、かゝる狭き絹に、千羽の鳥を寫さんこといと難し、先づ十の一  
ばかりにして、責を塞がんかどて、數日の精神を勞し、辛うじて、  
各種の禽鳥九十七羽を、處せく揮灑して、與へぬ。あまりの事に、  
その人呆然たり。せんとりは、即ち千鳥なりしなり。周峰の子は、  
かの圓山門屈指の名家徹山にして、應學の子應瑞の妻の妹を娶れり  
。狙仙の子を、雄仙といふ。乃父の筆力に肖ざりき。周峰は、狙仙

に謀り、互ひに、子を易へて教へしかば、徹山終に叔父狙仙の後を嗣ぎしなり。徹山は即ち耕冲翁の父執たり。

梅清處

(一) 小序

◎ 澱江の碧流に枕みて、輪蹄の音を外に、唔呷の琅々たるが聞ゆるは、梅清處塾たり。塾は、梅岬山本君が絳帳を下して、徒に授くる處なり。君なん、即ち往時浪華の騷壇に、一旗幟を樹てたりし竹溪翁の令嗣なる。余一夕、君を訪うて、若香の裏に、翁の舊事を聽き得たり。

(二) 山本梅岬……山本竹溪

◎ 翁の曾祖父日下先生は、山崎派の盛んなる土佐より起りて、京師に遊學し、護園の學を唱道して、論語私考を著し、朱物以外に一個

の<sup>けんかい</sup>見解を下したり。祖父玉岡先生家學を繼承したるが、父澹齋先生他より入りて、家を嗣ぐに及び、學統を一變して、朱子に歸しぬ。澹齋は、佐川の文武館に教授となりて、専ら詩を以て、生徒を薰陶せり。その澹泊齋詩鈔二卷は、秀色餐すべし。澹齋の二子、長は竹園、次は、即ち竹溪翁なり。當時この一家は、三蘇に比せられし事もありて、翁の通稱を轍といひしも、亦奇ならずや。

(三三) 山本竹溪・安積良齋

◎翁の父兄は、皆儒にして、詩を善くせり。この家庭に生長したる翁の腦底には、夙くより、既に詩を觀染したり。翁年二十九の時、笈を負うて、江戸に遊び、安積良齋に従學し、旁諸名流の間に周

旋せしが、一年にして、之を辭し、郷に歸るに臨み、師友各々贈言ありき。茲に、その二三を採録せん。

愛君滿腹是精神、歸去斯文須苦辛、遙識奎星照南海、俊才崛起幾多人、(安積良齋)

水晶花發客南歸、千里薰風逐子規、莫道獻親無個物、半肩擔得一囊詩、(大槻磐溪)

論文幾日共優游、臨別殷勤約再遊、縹緲烟波無限思、白帆穩入海南州、(重野成齋)

翁の才學は、師友間に稱へられたること、此の如くなりき。

(四) 安積氏の塾

◎翁が良齋の塾に、通學せし頃、その講堂は、十疊敷許にして、聽講するもの、八九十人、二方の縁側にまで、鮮詰の如くに、居並び、誰とて、書を手にするものもなく、はた書を置くべき餘地もなく、但墨斗を膝上に置きて、左の手に手牒、右の手に筆を持ちて、講を聽く、筆記するなり。かくて、良齋も亦書を觀ずして、講すること、精詳明晰なりき。

◎その寄宿舍には、七八人の塾生を容れて、廣さは、四疊に過ぎざりき。この故に、案と案と接し、膝と膝と交り、横臥すべき餘地を留めざりしかば、此舍内に在るもの、寢牀に就くはなく、睡るには、案に凭り、覺むれば、やがて又書を読みしなり。

(五) 竹溪の詩學……齋藤拙堂

◎翁の詩學は、遠く陸務觀に瓣香したる澹齋先生より受けしかば、すなはち亦、劔南集に潛心し、五七律を得意とせり。その後、齋藤拙堂を洞津に訪ひ、その塾に留まること數旬にして、拙堂が鐵研齋詩存二卷を手寫したり。拙堂は、高季廸を喜び、常に嘖々としてこれを稱したれば、翁もこれに因りて、青邱の妙境に悟入したりきとぞ。

易堂墨譚

(一) 小序

◎儒にして、筆札に工なる寺西易堂翁を、その瓦町一丁目の居に、訪ひぬ。翁齡七十三にして、鬚髮皆霜となり、方に疝を患へて、膝にあり。予の刺を通ずるや、病を扶けて、起きなほり、予をその枕邊に延ぎ、蒲團に凭りて、施々として、談らひ、殆んど身に病の在るを忘れたる如く、談酣あるに及びては、敷蒲團の外へすべり出づるまでに。

(二) 寺西易堂……藤森弘庵

◎翁は、名古屋の人なり。少時、平安に在りて、臨池の業を、柳澤

吾一に問ひ、江戸に遊びては、學を藤森弘庵、林鶴梁の二家に授り、書法はた弘庵より傳へられ、浪華に來りては、後藤松陰も從學せり。その後、東西に歴游し、遂に浪華に卜居せしは、明治二年の頃なりき。

◎弘庵嘗ていひしに、わが父は、武人なりしかば吾に劍術を教へんとせしかど、かく甚だしき短視なるもゑ、劍鉞を明視し難しとて、遂には、文人になれといひて、その道より棄てられたり。吾はそれより刻苦して、學問に従事し、家貧しきが爲に、寫本して、生活をなせり、といひき。この故に、春雨樓座右の書の注字は、蠅頭の細楷、鉄墨相半して、その整然たること、直ちに上版するに足れり。

◎弘庵の一生は、慷慨悲憤に終れり。さるに、その書を見れば、眞に、温潤よして玉の如し。翁これを怪みて、弘庵は叩きしに、備書の爲よ、かくもなれるかどて、弘庵は、一笑せりとか。又弘庵は、書法を大窪詩佛より受けたりともいひき。

◎弘庵が平生口祝せしは、褚河南の雁塔聖教序なりしにや、その臨せる處を、二三回も、翁は見き。是よて、弘庵が書法の由來する所は、知らるべし。

（三） 貫名海屋……卷菱湖

◎翁未だ柳城に居りし頃、貫名海屋は、游歴して一年半許滯留せり。翁は、やがて、村瀬太乙の許にて、海屋は兩三度も面晤せし事ありき。

りき。實よ、海屋は、尋常一様の書家にあらざりしなり。そのいまだ慈翁と號せざりし頃、卷菱湖は、江門に在りて、老大家と稱へられ、一世を睥睨すの概ありき。されど、海屋を稱揚して、その筆は及ぶべけれど、その氣韵は、及ぶべからず、といへり。又その門人參河の中谷某が蕭遠堂を辭して、郷に歸り、更に京攝に漫遊せんとするに方り、菱湖はその臆として、李北海の一帖を臨し、某に與へて、汝京華に入らば、之をもて、貫名君茂に視せや、彼は、北海に枕藉せるものところ聞きつれば、如何わが墨蹟を視るかを驗せよ、といひき。某後その言の如くせしに、海屋一見、驚嘆して止まず、斯の腕、斯の墨、何ぞ卷先生の平生に異なる、とて、披玩數刻、手

に帖を釋くことを忘れし程なりきとぞ。一家の推讓、此の如く、又一家の書眼の高きを見るべきなり。

(四) 後藤松陰……林鶴梁……易堂の書學

◎松陰は、殊に字義に深淵なりき。書家にはあらざりしに、草書の體勢をまで、知悉して、平生不用なる多畫の字たりとも、問へば、答ふることも、響の聲に應ずるが如くなりき。松陰は、平居恬淡寡欲、これに對して、春日の如く、鶴梁は、見るからに、とげくしくこれに、接しては、唯その怒りに觸れざらんやうに勉めたり。

◎翁は、談尾に臨みて、「瑞圖も、瑞圖くさからぬ處に、中々妙味があります、自分も一寸指を染めたが、今は、先づ魯公の麻姑壇碑

に潜心してゐます」といひぬ。あはれ、翁の筆や、年と共に、老蒼と古色を帯びゆきて、朱閑雲の所謂、仙壇記は、尤も筆畫嚴整、行間茂密なり、どの境に入れるめり。





(二) 小 序……敷田年治

◎國學界の靈光として、歸存せるは、敷田年治翁なり。文好む梅莊に程遠からぬ東高津に、居を占め、門に榜して、百園塾といふ。

◎翁近來病の爲に、多くは客に接せられず、とおのれ豫てより聞きたれば、やがて、翁の門下なる滋岡從長ぬしを介して、さてこそ、今日は(六日)雲門を敲きつるなれ。おのれ先づ刺を通じて、起居を候すれば、令室は、病床ながらこなたへ、といひて、おのれを十疊ばかりの一室に延く。

◎この廣き室の中央に、衝立を左にして、小さき置火閣に凭りたる長き白鬚の一老翁あり。これなん斯道の偉人たる八十五齡の百園先生なる。爛々として、人を射る眼光、流石に、世の耄耋の徒と、その選を異にせるを見る。

◎令室いふ、年八十を越へたる身なれど、常に健かにてありしが、一昨年の秋の頃、人の請ふまゝ一日に、七八度も講義をなしつゞけて、好める道とて、知らず識らずの間に、氣根を疲らしたりけん、それより、ゆくりなくも、舌もつれて、言の文明かならぬ様になれるぞ、是非もなき。今は、耳も眼も、さして衰へたり、といふ程にもわらざれど、養生の爲に、讀書すら廢しをり。といひて終始翁の側を離れず。翁の言の分明に聞ぬふし／＼を、日頃聞き慣れたる

語調どて、直ちに會心して、おのれにうつされしは。

(二二) 鈴木重胤……黒川春村……黒川真頼……栗田寛  
……小田清雄

◎近代の學者は、鈴木重胤だ。幕府の内命で、廢帝の故事を調べたから、勤王家に陪殺せられたといふは、全く平田派の中傷であつて、重胤の爲に冤である。重胤は、自分と共に、勤王の志厚く中々左様な幕命を受ける筈がなかつた。何故重胤は、平田派に憎まれたかといふに、最初此派の學を奉じた處、流石に識見ある男なれば、早くも山師の學問なる事を看破して、後一切これを棄て、自立したから、同派は、此男を讐敵として、攻撃したのだ。陪殺の下手人も大抵分つてゐるらしい。何思うても、重胤は惜しい人だ。

◎次に能く相往來したのは、黒川春村だ。春村が臨終の時、我が手を握つて、宜しく後を頼むといつた。春村には、學問の後を嗣ぐべき子がなかつたから、門人中に選んで、今の真頼を薦めて、學統を承けさせたのだ。今は、真頼も博士とかいつて、威張つてゐるさうだが、故あつて、此方から交際はしない。

◎維新以後の學者は、栗田寛だ。餘程段が違ふが年のわかひのに（翁より見て）學問の心懸が好くて後來に望みのあつたのは、小田清雄で、先づこの近邊にての大將であつた。が皆先に逝つて、自分だけ、取残された。長生すると、友人許か、門人等にまでも、先だゝれる。

(三) 百園の著述

◎著述もあるが、細いものは、此頃、門人の勧めに因りて、一纏めに、雑纂として、出版しかけた。何かして、國典字徵五十五巻だけは、世に出したいが、今は校合するのに困る。

◎但この談を傾聴するに、多時を費し、病床なる翁を勞すること大なるのみか、令室の清暇をさへ妨げつるが、心なきことさなれば、猶もとおもふ心を殘し、謝をのべて、退りぬ。



泊園書院

(一) 小序……藤澤南岳……浪華の徂徠派

◎文學の士、一たび浪華に來らば、必ず泊園書院を叩くなるべし。

泊園書院とは、藤澤南岳翁の塾名なり。方今浪華の漢學が、文士の間に、重きを置かれたるは、斯翁在るが爲とぞ、いはまし。

◎浪華の地に、始めて物子の學を倡へしは、菅沼東郭、菅谷甘谷の二人なりき。次いで、片山北海起りて、混沌社を創め、大に文場に勢力を占めたりしが、北海歿して、その社盟冷かになりし後、文政九年に至り、東咳先生讚岐より來りて、此に帷を下し、護園の學をもて、徒に授け、家塾甚だ盛んなりき。これを、此地此學の中興と

す。南岳翁は、即ち東咳先生の令嗣にして、その家を續ぎしは、ま  
さに元治元年なりき。

(三三) 南岳の學統・その家庭

◎その學統を尋ぬるに、甘谷は、物子より承けて、これを、藤川東園  
に傳へ、東園は、中山城山に傳へ、城山は、東咳先生に傳へて、今  
の南岳翁に至りたるなり。

◎翁の學問文章は、すべて家庭にて、受けたり。一人子として、尊考  
の常に膝下を離さざりしに因れり。さるに、翁は、その令嗣黃鵠君  
に學ばするには、幼時より、稻垣秋莊翁に萬事を託して、その塾に  
起臥せしめ、一篇の詩文添削たも、なざざりき。今や、黃鵠君學成

りて、膝下に侍し、翁に代りて、書院の講をつかさどり、三世儒と  
して、家聲を墮さず。翁は、古への子をかへて教ふの言に感ありて  
とよ。

(三三) 泊園書院の再興……歲寒吟社

◎翁は、明治元年より六年の間、吏となりて、國事の爲、四方に奔  
走せしが、その七年、再び浪華に來り、當時、漢學排斥の時代なり  
しにも拘らず、萬艱を排して、再び家塾を開き、大に斯道を倡へて、  
殆んど回瀾の槩あり。かくて、時世漸う變りゆきて、漢學の廢つべ  
からざるやうになりしかば、隨ひて、泊園書院も、旺盛の運に赴き  
、一時挾冊の徒、三百餘人に上れり。人皆翁の先見に服せりといふ。

◎高見照陽、阪本葵園の世に在りしや、翁と三人相謀り、歲寒吟社  
 といふを結びて、風雅を揜揚したりしが、今は、照陽、葵園見るべ  
 からず、翁獨り歸存して、浪華文壇の牛耳を執れるぞ、尤も尊重す  
 べし。

みどりくし

一名滄桑錄

(二)

◎わが浪華の地、往時は、學士聞人に乏しからざりき。物換り星移  
 りて、今その住みたりし蹟を訪へば、文書の傳ふる所、口碑の存す  
 る所と同じからず。屋宇木石、はたその昔のさまにあらず。人をし  
 て俯仰低回、滄桑の感に堪へざらしむ。やがて、此録あるもゑんな  
 り。

◎小竹先生篠崎長左衛門の宅は、尼崎町二丁目に在りき。今の今  
 橋五丁目の南側にして、魚の棚の角より西へ折りまげて、西横堀迄

なり。今は、さらし竹の人除したる家七戸となり、中に天狗煙草の看板も吊されてあり。その八戸目は、麥酒會社の倉庫にして、赤煉瓦いかめしく疊まれたり。かの小竹齋といひ、畏堂といひし讀書の處は、何處にてかありけん。

◎小竹の父三島が、舊宅を江戸濠に買ひし事は、古賀精里の三島翁墓碣銘に見えたり。小竹の尼崎町お移りしは、父の歿後にして、天保二年なり。小竹齋詩鈔に、『辛卯夏日卜居』の五古九首あり。辛卯は、即ち天保二年の幹枝なり。その第一首に  
先人有敝廬、落魄不能守、爾來十五年、筆舌力耕耦、日見雪侵頭、無念印繫肘、卜宅里閭中、妻孥安井臼、

といへるに據りて、證すべし。

◎猶その詩中に、梅花社の扁額も、先人遺愛の梅樹一株をも、移し由をいへれど、爾來、地その主の換はりぬること幾ばくなるを知らず。扁や、何地に失せけん。梅や、いつの間に枯れけん。

◎梅にして、猶わらば、その昔の春の月を語らんは、寺西易堂翁か、雲州の内村鱸香翁か。

◎『可喜門塾就、三面豁窓疏』はその第六首なり。此塾中に在りて、不斷絹夜具に寝て、他の書生を盪羨せしめたるは、三河の豪農山中猷(信天翁)なりき。

◎小竹は、中島棕隱の爲に『書は貫名、詩は山陽に、金は弱(小竹

の名)猪飼けいしよに、粹は文吉(棕隱の通稱)とうたはれ、銅臭家として、貶しめられたれど、常に善く財を理めて、儉素自ら守りたればこそ、富有の儒者として、かゝる大家屋に住ひしなれ。

(二三)

◎嘉永四年五月八日、小竹歿して、義子竹陰その葬儀を行ひしに、行列の先、既に天満寺町の天徳寺に達しても、猶陸續として、その列後は、尼崎橋東なる篠家の門を出でざりし程なりといふ。儒家の葬儀にして、かく盛なりしは、未曾有の事なるべし。

◎大江橋の北詰を東へ入れば、濱側に、二三株の水楊うゑられて、その邊、人力車の駐車場となり、日夜車夫集ひて、客を待てり。此處

は、十時梅屋が落々たる風懐もて、日々三斗の墨汁を縦横揮灑せし夢清軒の蹟なり。混沍社の諸老も、時に來りて、吟哦を興じあへりしならん。梅屋世に背いてより後は、此軒遂に小竹の有となり、更にひろめて、五勝樓といふを造りて、遊息の處とせり、と中井蘆郷子は語りき。その五勝とは、何々ぞ。今は、知るべからず。對岸の中之島も、昔の景にあらず。五勝の一に數へられたらんかとも覺ゆる山崎の鼻の松も、既に朽ちて、空しく、豊公祠前に古根を残せり。軒や、樓や、また斷礎をだに留めざりけり。

◎濱和助老人、便面一枚を携へ來りて、余に示し浪華文學史料にもや、といふ。余受けて閱すれば三島の戯作なり。湖海の豪士とうた

はれし三島にして、かゝる優美の事ある、その襟懐、最も想ふべし。  
。やがて、こゝに録して、その傳を廣うせんと欲す。これにつけて  
も、知らまはしきは、三島が閑坐して、箏聲を愛聽せし江戸濠の舊  
宅にこそ。その戲作といふは、

福壽草

三島後崎翁作

調子三下り之事

菊川檢校調

にはどりの、あしたを待つて、さく花の、さいはひとことふも兼  
ねし、名もいまの、ひじりの庭のこよみ草、むかしにくらべ、萬  
代の、かはらぬ國の春ぞめでたき。

先君壽近八十、晩年使兒女彈箏膝前、戲作此曲授之、蓋亦含飴

弄孫之意也、君沒後、失其詞、而不復傳焉、三洲前田兄家藏君  
所手筆便面一幅、兄室常子自幼善箏、而及讖君、頃日、出視懷  
舊、請其師菊澤檢校調之、余聞其奏、詞正調和、樂而不淫、用之  
鄉人、亦可以助風化矣、兄欲刊而傳世、故懲懇而跋其末、後四  
十年、嘉永三年庚戌正月七十歲小竹長翁彌書

(三三)

◎山陽を師とし、小竹を岳翁としたる、後藤松陰は梶木町、即ち今  
の北濱五丁目の南側に住りしが、その舊宅、今は、商業興信所と  
なれり。嘉永六年の新版に係る『浪華風流月旦評名橋長短録』には、  
松陰を、百二十二間半の天神橋に見立て、勸進元に擬したり。その



天神橋さへ、今は鐵造のと架け替れり。遷遷は、ひとり家宅のみかは。

◎篠門の四天王と稱へられしは、篠崎竹陰（名は槩、字は公槩、通稱は、長平、別に訥堂と號す）奥野小山（名は純、字は温夫、通稱は彌太郎、別に胖庵、又は寸碧樓と號す）安藤秋里（名は、秉字は維義、通稱は太郎、別に介軒と號す）橋本香坡（名は通、字は大略、通稱は半助、別に靜庵、又は毛山人と號す）なり。竹陰の舊居は、既に記しつれば、是より、他の三家に及ばすべし。

◎小山のは、島町二丁目松屋町を東へ入る、南側なり。今は二軒に分たれて、官吏や、商賈や、いく度か住みかはりて、琅々の書聲は、

聞ゆすなれり。當時「小山の大山」と嘲りし人もありし由なれど、舊居は、さして大山師の住ふべき程にも、見ゆぬぞ、をかしき。

◎小山に嗣子なし。墓碑は、西天満寺町圓通院に吳北渚が書きたる小やかなるがあり。先年、おのれ「浪華墓跡考」を作るとき、此墓をも掃ひしが、寺僧は、唯東京の棚橋氏のみ墓參せらる、と語りき。その後、梅塙老人に逢ひて聞けば、寺僧のいひし棚橋氏は、即ち棚橋文學士の母氏絢子（初の名は貞子）なりしなり。絢子は、高麗橋郵便電信局の西隣なりし茨木屋庄左衛門の女にして、少き時、小山に従遊し、稍得る所ありき。やがて自ら進みて、盲目なる儒士棚橋家に嫁し、能く婦道を盡し、今は、女子教育家として、名聲江湖

に藉々たり。絢子の今日ある、實に、小山薫陶の致す所なれば、深く師恩を感じて、亡き人に事ふること猶在すが如くせりとぞ。

◎秋里は、中之島の大江橋南詰西へ入りたる處に住めり。舊讀書の處は、現に日本銀行建築地敷園の中に在り。一昨年頃、石町に住みたりし判事安藤定裕氏は、即ち秋里の息なり。秋里が殊に香坡と意氣相投合したりし事は、氏が香坡の西遊詩稿の跋にて知られたり。阪谷朗廬が同書の序に、

秋里子訓皆尊王慷慨之士、而秋里墓木已拱矣、使之與香坡俱存乎今、其同死於疑案乎、將奉徵命赫奕於廟堂乎、抑感慨嘔血益激昂也、皆未可知也、

といへるにても、略秋里の人となりを見すべし。墓は、くらなは阪の梅舊院にありて、石の表に「秋里安藤先生墓」と行書にて刻める外、碑文も、歿年月もなく、はた寺藏の證果簿にも所載なし。

(四)

◎橋本香坡は、上毛沼田の産なれば、別に毛山人と號せるなり。二親を奉じて、天満堀川なる沼田侯の藩邸に在りき。その時の詩に曰く、

天満新渠雜咏四首

丁酉之歲、官命鑿渠於東天満、上引淀江、下注堀川、居人便之、時予住堀川、

滌穢人無腰腿疾、穿流地有汲烹宜、浴來明府新恩澤、日夕臨渠拜碧漪、

豈嘗穿渠利四民、栽花植柳賜詩人、吾居最近偏堪喜、嘯綠吟紅夕又晨、

柳煙櫻雪壓新塘、旗閃晚風春酒香、撲面紅塵人絡繹、波間倒步綺羅光、

積塵山畔笑聲高、春色蕩心夫婦橋、行到柳櫻深處望、源郎渡上正招招、

丁酉は、天保八年、新渠は、樋の口に通ずる細流なり。今は、黒濁の水停滞して、昔の碧漪は、何處にか覓めん。腰腿を病む人、依然

として絶わす、汲烹の宜しきを見ず、矧んや柳煙櫻雪酒旗裙屐の繁華一掃し去れるをや。猶笑聲高し、と歌ひし積塵山は、變じて罪囚を懲らす處となりて、唯往時にかはらぬは、夫婦橋と源郎渡とあるのみ。さて、香坡が、この詩を吟味し、この景に眷戀せし藩邸は、今も猶堀川蛭子の社の南隣りて、精米所となり、杵臼の音、藁々たり。

◎平野町一丁目に住める書林淺井龍章堂主人は、香坡の遺孤を撫字したるものなり。その言にいはいはく、香坡先生は、伊丹より歸阪の後、鞞中通一丁目、即ち敷津橋筋を羽子板橋筋西へ入りたる南側の小表前裁ある家に住はれて、教授しをられたるが、冤罪にて新

選組に引かれたまひしも此家よりなりき。此家、今は改築せられて何れをるれと指し難し。先生の庚死せられし松屋町の牢屋も變じて雜貨屋列の店舗となれり。

◎小竹の歿せし時、門人中にて、白衣を着け、編笠を被り、亡師の棺を昇さしは、橋本半助(香坡)安藤太郎(秋里)内村友助(鱸香)金本顯藏(摩齋)等なりき。當時、奥野小山は、及門の人なるに、師と相容れざる所ありし故にか、自ら會葬せず、一門生を遣して送らしめしかば、篠門において、大い物議を生じたりきとぞ。是も龍章老人の物語なり。類に依りて、書き添へつ。

◎香坡が伊丹の明倫堂を辭せし後、これに代りて教授たりしは、金本摩齋なりき。摩齋は、安政の頃、江戸堀の權屋町に住めりしが、今は、その舊居を記憶せる人もなくなれり。

◎香坡の遺孤は、二人ありて、皆女子なり。龍章老人の手を離れしより、如何にしけん、その踪跡を知らず。小竹の曾孫は、心齋橋なる書肆松村文海堂に管店子となりて、牙籌を握れる篠崎純吉、即ち是なり。儒士の裔、書林となるは、因縁なきにあらず。

(五)

◎『貌姑射秘言』に監名を博したる葎居老人黒澤翁滿は、安政の頃、武州忍藩の藏屋敷に、留守居役として、來り住めり。『難波職人歌合』よ才華を煥發せしは、この邸内なるべし。この邸は、堂島濱

北の山に  
住まひし

通大江橋筋より一つ西の辻にて、東北角に在り。今は、幾戸にか、  
割られて、下宿屋などになれり。

◎歌人長伯以来の傳燈さゆやらぬ有賀家の宗匠長鄰は、天満堀  
川のごもく山に住みて、環堵蕭然たり。當時、貧甚しかりけれど、  
家聲を墜さじとて、一葉の短冊、金百匹の潤筆ならでは、染めざり  
けり。令子長雄、長文は方今知名の士にして、都門繁華の裡に老親  
を奉じて住り。復ごもく山の當時の夢寢にだも、入らざるべし。  
さて老宗匠が朝な夕な、歌思ひし家の跡を尋ねれば、思ひさや、監  
獄署の煉瓦高塀に圍繞せられてあらんとは。

◎南組の役人岸田禮助といへば、一個の俗漢の如くに聞ゆれど、彼  
の裏面は、松の本素屋宗匠とて俳諧壇上よ仰がれたる一家たり  
しなり。素屋はせきたや町即ち今の南農人町一丁目の北側に住めり  
。いとも素朴なる焼杉の板塀より、橙の樹の梢をのぞかせ、寥蕭  
たる冠木門の内には、鳳尾竹の生垣して、隣園との境を限れり。誰  
も一見して、先づその風流詞客の宅たるを知る。室に匾して、禪俳  
一味といふ。小竹の筆に係る。素屋の歿後、余この宅を賃して、兩  
三年住めりしが、今復此を過れば、門庭屋宇、盡く變じて、南大江  
小學校の敷地となれり。あはれ。

(六六)

◎嘉永安政の頃、柳生藩士小山田某、米相場にて奇利を博し、新に

地を江戸堀北通犬齋橋筋東へ入る北側に購ひ、門戸を大にし、嚴めしき支關を構へ、庭園には、花木竹石を移し栽ゑて、住ひしが、後故ありて、此邸を引拂ひ、歸藩するに際し、これを譲り受けしは、菴沼萩原廣道なりき。

◎菴沼此に移り住みて、家の號をば、出石居といひ又鹿鳴草舎ともいへり。かの源氏物語評釋の稿本を作りて、國文評隱の法門を開きしも、此地なるべし。菴沼が、篠崎竹陰、緒方洪庵、中環等の爲に、源語を講せし春日國手の宅は、今も儼然として、今橋に存すれど、稿本を作りしこの宅は、菴沼の歿ると共に、人の有となり。今はまた變じて、大阪教會堂となり、讚美歌の聲ぞ、ありし昔の晤

呷には替れる。その門戸支關、さては庭園など、皆舊觀を改められ、會堂の前には、瑜珈梨樹おはれ氣に枝長う垂れたり。

◎松野眞維翁がいはれしに、おのれ少かりし時、淡路より上り來て、萩原先生の門に詣り、教を受けしが、その門内に一本の老松ありて、その梢に、鳥巢營り。講讀の暇に立ち出で、竿竹もて、巢の中の鳥を驚かし、先生に叱られし事、度々ありき。先生下世の後はせめてこの松をば、いまそかりし世を懷ぶよすがにもと思ひしに、家の主かはるにつけて、松も枯れて、薪にやなりはてけん。今はその影だになし。といはれき。

◎現に天滿堀川蛭子神社の神職たる松岸恭明翁は、年八十を躋りて

猶健やかなり。曾て、出石居の門に遊びて、終始一の如くなりきと傳へ聞きたれば、おのれ、菅原の神につかうまつれる滋岡從長ぬしの引きあはせにて、松岸翁を訪ひ、葭沼が轉々居を移し、いはれを聞きにき。その順序をいへば、

一、京町堀羽子板橋南詰西へ七八軒入りたる北側の露地にて東の端、

二、北野村大融寺東の門一丁北へ入る某の隠居處を借りて、

三、高麗橋一丁目北側の一軒露地、

四、江戸堀南通五丁目両國橋筋半町西の北側、

五、江戸堀北通一丁目天齋橋筋北側、

六、土佐堀筑前橋南詰東へ入る濱側、

葭沼は、何故に、かくもしばし居を移し、かといふに、當時、いたく糊口に窮し、書林の爲に、筆工のわざ忙はしく、人の尋ねこんごとの煩はしさに、かく跡をくらましつるなりとか。

◎ある年の暮に、葭沼は、窮困身に迫りぬれば、この數日を如何すぐさん、とひたすら眉を打ひそめをりしが、ふと思ひつきて、一夜の間に、『和歌心の種』の一篇を草して、翌朝書林に携へゆき、若干の金にかへて、辛うじて、その年をこしたりとぞ。此一篇は、葭沼が一氣に呵成せしものながら、今も猶詞林のうひまなびに重寶がられをり。これは、松岸翁が話の端に聞きし逸事なり。

(七七)

◎中之島の筑前屋敷、今は、倉庫會社とあり、對門の水涯には、亭榭箇々ありしが、盡く取り拂はれたり。この中近水の一小樓こそ、即ち雙松岡なりしならめ。雙松は、松本、松林にして、岡は、鹿門翁の氏たり。今や、雙松既に朽ち、水樓も亦廢し、特り一岡歸存せり。是れ尤も欽仰すべし。余頃日、鹿田松雲堂主人を訪ひ、翁の手書七律四首を觀る。此に節録して、この遺址を證す。

過雙松岡遺址、有懷于奎堂飯山二友、併引。

文久辛酉、邂逅松本奎堂松林飯山於浪華、詫爲奇緣、借中島水樓同寓、河野鐵兜書標名曰雙松岡、京阪間、一時盛傳雙松岡之名、

虹影懸空中島橋、雙松岡樹薄層霄、黃墟賞醉感新舊、華表回頭變市朝、青眼高歌歸夢境、清風明月想丰標、白頭三十年前客、泣向蒼天賦大招、

◎『編年日本外史』の跋を讀みし人は、重野成齋翁も亦此地に帷を下し、之を知れるならん。翁の寓せしは、本町一丁目筋の東北角の家なりき。翁の鹿兒島に歸りて後は、高谷龍洲代りて徒に授けられたりしが、程なく塾を閉ぢて、彫刻師また代り住めり。今は、誰が家とされるにか。

◎廣瀬旭莊は、淡路町五丁目御堂筋西へ入る南側の一軒露次の内に塾を開きたりき。今の幾代席は、即ちその址なり。昔の吟哦、今



は、絲肉燥雜の聲と變れるも、あすか川のならひにこそ。

◎上野梅塲老人のいひしに、旭莊先生の塾に在りて、講讀吟咏に汲汲たりしもの、浪華に生存せるは、余と行徳玉江との二人に過ぎず、當時十二歳なりし孝之介君（林外）を、坊さまとて、負ひてあるさしも、黄梁一炊の夢となりて、今や、先生の墓木既に拱し、林外はた道山に歸りて、久しうなりぬ。余と玉江とは、白髮種々として、衰殘の餘に舊業を守れり。再び追隨せんとすれども、得べからず、といとも打しをれて、語りしは、師弟の情誼、さもありなん。

(八)

◎かごや町といひしは、今の京町堀上通一丁目邊なり。西横堀を西

へ入れば、火災保險會社の板塀あり。その西隣は、今幾多氏の持家となれるが、浪華の雜著家 曉鍾 成の僑居せし處なり。鍾成「浪華の賑ひ」を著して、難波大津湯の圖中に、おのが僑寓をも、寫し出させたるが、その湯、今は、退轉して、昔の様にあらず。僑寓も、亦建てかへられて、かの床下に設けたる愛犬の通行穴など、再び觀るべからず。かごや町に住みかはりしは、難波僑寓の後年なりき。以上は、松雲及び好古生の語りし所なり。

◎二十餘年前における浪華納涼の盛を説かんには、先指を鍋島の濱に屈するならん。鍋島の濱とは、佐賀藩邸前の澱江に枕める處をいふなり。後物星轉換して、其藩邸は、監獄となり、又變じて控訴院

地方裁判所は、建築せられ、その地、遂に納涼の客なきに至れり。松尾香草が、明治十六七年頃の詩に『隔江曾跡無人問、月白風清、舊鍋洲』といひしは、洵に然なり。

◎元の八聯隊兵營内に、維新後までは、一株の亭々たる五鬣松ありき。誰が手植にか、と問へば、大石内藏助良雄のすさびなりしなり。もと此處は、弓術の名手たる京橋定番與力牧原元三郎の邸宅にして、良雄これに師事し、赤穂より上阪の折には、必ずこの家に宿りけるが、ある時、良雄内平野町神明の夜店にて、尺許の五鬣松を購ひ歸り、手づから庭隅に栽る。爾後、おとづるゝたびに、撫して盤桓せしは、即ち是なり。しかも今はた砲兵營となりて、馬蹄車轍

の行きかひいと繁く、彼の孤松は、復覓むべからず。等しく手植の樹ながら、唯赤城故宅の垂絲櫻は、そのひこはねに、忠芬義芳を傳へさせて、年毎の春風に笑ふめり。樹にもかく幸不幸はあるものにか。

◎東照權現の御祠、及び建國寺のありしは、川崎造幣局の東北園のあたりなるべし。其寺院庭上の景石は、土居通夫氏の砌中に移されその、茶室は、建てかへられて、土佐堀裏町なる梅花女學校隔壁の家となれり。屋根の瓦に印したる三つ葵こと、いともゆかしう覺ゆれ。社友久松澱江兄、曾て此家に住ひしことあり。大鹽中齋が洗心洞、はた東北園の近傍にてやありけん。

(四)

◎名家の舊宅の、その所在地の大槩のみ、文書に記されて、何れの家を、それか、と尋ねまふもの、いと多かり。おのれ久しくこれを求めて、未だ獲ず。左に列擧して、大方博雅の垂教を請ふ。

◎混沌詩社の盟主たりし片山北海の孤松館は、平野町淀屋橋筋北横町に在りき。東條琴臺の先哲叢談續篇なる北海傳の條下に、淀橋の北に新居を築きて、數詩星を聚めしなど書けるは、即ち此家なるべし。されど、淀橋の北といへるぞ、恐らくは、檢索の錯りなるべき。◎頼春水が在津紀事より「北海片翁、初在阿波橋北、陶齋趙翁在鹽坊」と書けるが、前條の新居へは、此宅より移住せしなるべし。

◎春水の青山社は、江戸堀北一丁目に在りき。即ち飯岡澹寧の女を娶りて、山陽を生みし處。

◎篠田徳庵とは、澹寧の通稱にして、立賣堀南裏町に住めりき。

◎萬子琴の御風樓は、玉江橋の北畔に在りて、月に雪に、春水と共に襟を披いて、微吟淺酌の清快をほしにせり。京儒宮崎筠圃が揮灑せし樓の扁聯に、今は誰が手に落ちたるか、知るべからず。

◎垂葭館は、鳥山崧岳が書堂の名。船越町松屋町筋東へ入る處。崧岳夫妻の瘞骨處も、梅花を植ゑて標したるは、何處の寺ぞ。

◎學統は、兄樂郊より護園の一派を傳へ、筆札は、石清水坊の流れを汲める細合學半齋は、今橋二丁目に住めりき。

◎混沌社こんどんしやの一派はつと相對峙あひたいじしたる懷德書院くわいとくしよんの中井履軒なかゐりけんは、別に南本町みなみほんまち二丁目ぢやうぢめに居まゐを下くだしむ。

◎淡路あはぢの橋本晚翠はしもとばんさいは、金澤町かなざわぢ。(今の南久寶寺町一丁目邊)

◎阿波あはの柴秋村しばしゆせんは、博勞町はくろうぢ。

◎詩人小原竹香しやんを はらちくかうの父ちちなる歌人瓊廼舍うたひとたまのや千坐ちくらは、船越町ふねこしぢやう。

◎やにどのゝあるに隆正たうまさを義父ぎふとしたりし野之口正武ののくちまさたけは、唐物町からものまち。

◎桂園けいえんの巨壁熊谷直好きよはくくまがひなよし、及び稻室足穂いなむらたりほは、天王寺村てんのうじむらに寓あしたりき。

(十)

◎更まじに、嘉永安政間かひあんせいけんにおける南北畫人なんぼくがいのじんの故居こきよを尋ねん。

◎畫訣がくけつを増山雪齋ますやまつさい侯こう受け、後元のちげんの四家しかを祖そとしたりといふ金子雪かねこせつ

操さうは、島町一丁目しまぢやうぢめに寓居あやうきを占めたり。

◎吉川松谷よしかわしょうこくは、自ら南北一致なんぼくいつしを唱となへ、尤も意いを花鳥くわてうに得えたり。前に道修町四丁目ぢやうぢめに寓あし、後に瓦屋橋わらやばしの東ひがしに住すめり。

◎谷寫山たにしやせんの門もんより出いで、後純のちじゆんら南宗なんしゆに歸きし、洗鍊せんれんの筆墨ひつぼく、善よく山水さんすゐ花鳥人物くわてうじんぶつを揮灑きさいしたる魚住荊石うをすまけいせきの居きよは、阿波殿橋あはどのばしの西にしに在ありしが、その墓はかは、福島ふくしまの妙徳寺めうとくじ (五百羅漢ごひやくらん) に現存げんぞんせり。

◎鼎金かみへきん城じやうは、春嶽しゆんがくの子こなり。畫法がわはふを父ちちより傳つたへて、優いゆうに南宗なんしゆの妙品めうひんに入る。岡田半江おかたはんかうその畫がわを見て、「鼎氏有子かみうぢありこ、春嶽可嘆しゆんがくたんとん」と嘆賞たんしやうせ

しは、さる事ことなり。舊居きゆうきよは、福島ふくしまに在ありて、墓はかも、荊石けいせきのと同寺どうじに存ぞんし、相距あひさること遠とほからず。

◎その人存して、その舊栖の處の尋ね難きは、田能村直入なり。當時、高麗橋四丁目に住みたるが何れの家なりけん。

◎臨摸に長けたりとの評判ありし忍頂寺梅谷の居は、堂島に在りき。

◎小石石麟は、初め中林竹洞に學び、後清人陳逸舟に、長崎に就き、潑墨隨形の功を積み、一家を成したり。當時、大手通二丁目に

住みしが、維新の後、北濱一丁目に卜居せり。目下「よしめし草」の編輯に従事せる小石青麟は、即ち石麟の嗣子なり。

◎狙仙を祖とし、徹山を義父とし、歴世丹青を以て名聲ありし森一鳳は、その祖、その義父と稍筆路の異なるめれど、亦名家たるを失はず。斯技に因りて、肥後藩の俸を受け、中之島なる同藩邸北門外

に寓せり。

◎高嵩谷世々慕命を奉じて、日光山神廟の畫屏障を修補して、甚だ

勤めたり。嵩溪の男にして、祖の號嵩谷を襲げるなり。この舊寓は

谷町三丁目に在り。

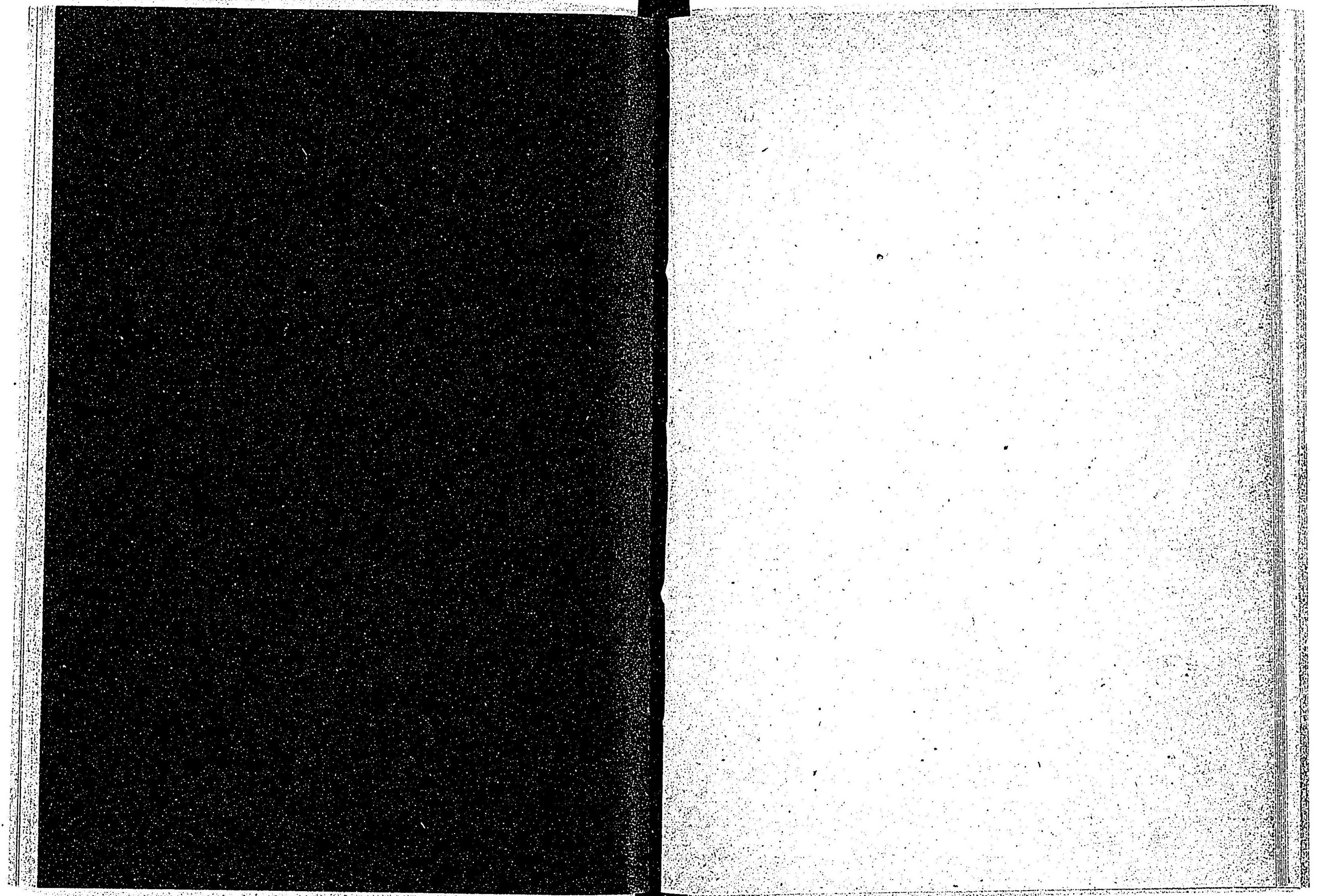
◎浮世小路に幽棲して、圓渾流麗の筆を渲めしは、西山芳園ありき

。その嗣子完瑛も亦地下に入れり。西山の一派にして、能くその衣

鉢を傳ふるものは、抑も誰ぞ。

◎鎌田巖松も浮世小路に住みて、間淨自ら娛めり。故にこの畫亦間淨なり。

(完)



## 浪華詩壇小史

我が浪華の地は、漢學の始めて、渡り來し地なれど、當時、その講究は、僅に上流少數の人こそしつれ、固より、廣くは、傳播せざりしなり。まして、詩賦の如きは、如何なる有様にてかありけん。

彼の王博士が、浪華津の歌は、元詩章なりしを、時の史臣が、三十一文字の和歌に引き直して、その義を通せしなり、といふ説はあれど、邈遠たる往昔の事にして、載籍の傳ふる所、罕なれば、その審詳を知るによしなし。倘しこの説の眞ならんには、縦令、異域の人の篇什たりとも、即ち、我が浪華を以て、本朝に代ける漢詩創造の

地と謂はざるべからざるなり。

高津大宮の址、荒蕪に歸してより、蒼々たる葦葎に、風戦ぐ寂寥の處となり、あるは、屢戦亂の巷となりて、矢叫びの音、太刀打の響いと騒しかりけるからに、絃誦の聲は、久しく絶えたりけり。かくて、星轉り物換り、元和偃武の時に至りて、東照公大に文教を振興せしかば、その惠、漸次に全國に被りて、この地における漢學も、此際にはじめて、萌芽を茁しぬ。

是に於て、始めて帷を下し、は、如竹散人となす。されど、散人は、詩章の道に指を染めざりしにや、その篇什の後世に傳れるものを見ず。爾後、幾ばくもならぬに、散人は、飄然として、此地を去りし

かば、帷下また晤啣の絶ぬること、五十餘年なりき。

これに次ぎて興りしは、五井持軒なり。持軒は、四書屋加助と綽號せられし程ありて、所謂道學先生なりしかば、詩學の講究には、及ばざりしが、唯和歌の道をば下河邊長流に問ひき。その子蘭洲（名は純禎、字は子祥、通稱は藤九郎）能く家學を奉じて、更にこれを擴充し、又詞章に堪能なりしかど、その作の存せるはいと稀なり。享保十一年、中井發庵（名は誠之、字は叔貴、通稱は忠藏）官に請ひて、尼崎坊（今の今橋）に學校を興し、懷徳書院といふ。乃ち京都なる三宅石庵を請じて、講師となし、己は、蘭洲と共に助教たり。されど、詩學を教授することはなかりき。



贊庵の二子、竹山（名は積善、字は子慶、一號は漢翁、通稱は善太）  
 履軒（名は積德、字は處叔、通稱は德次）共に蘭洲に師事して、程  
 朱の學を修め、遂に一代の巨匠となりて、時人に、中井氏の雙壁と  
 稱へられたり。田中金峯の詩に、「一自老泉生二子、奮將腕力起斯賢  
 、城中絃誦終無絕、傳得蘇家兄弟名、」といへるは、是その實を記せ  
 るなり。この懷德堂の一派に就て、特に表出すべきは、竹山、蕉園  
 の二人とす。

竹山經史を諳練せること、一時並ぶものなく、詩文の雄渾雅健なる  
 こと、世の推す所となれり。その詩を論ずること、精密にして、嘗  
 て著しい詩律兆若干卷は、例を援き、圖を擧げて、懇切に體裁法格

を示したれば、學者の爲に、好津筏とこそ、當時には稱せられしか。

賴春水の作りし盧松江が唐詩平側考の序を左に摘録す。

詩律兆浪華竹山居士所著、人多病之以煩苛、曰居士取其可徵、而徵之唐詩、恐未必  
 然也、是獨囿於流俗苟簡之式、而昧於正拗得宜之律、弗思甚也、余在江都、有一詩  
 客、來舉或人說、曰苟非再檢四唐之詩、燭照計數、別陶鑄一竹山、則律兆之編、孰  
 容可否、是言似淺、而其旨深矣、今於翁之詩考亦云、……（春水遺稿）

その集を、奠陰略稿といふ。左に近體數首を録して、剛柔共に至れ  
 る所を示さん。

大阪城

金城臨眺日、勝國事堪哀、隆準元天授、孤兒豈霸才。當櫺群障  
 出、接堞大江廻、形勝依然在、千秋重鎮開、（奠陰畧稿）

邊 詞

虜騎奔逃烽火開、秋風吹老玉門關、沙場日暮黃塵起、知是將軍射虎還、  
(日本詩選)

過早雲寺

八州封殖茂三隣、五世雄威役百神、今日空山鐘磬寂、老僧時掃墓前塵、  
(采風集)

宮 怨

清變驚夢響丁丁、錯謂君王向此經、不識綠陰多鬪雀、牡丹花上觸金鈴、  
(日本詩選)

履軒は、學問較偏僻に傾きて、事々凡に超ゆることを好めり。故に

この詩、必ず古韻を用ひたり。

枕上雜題

字内有斯氣、宙間無斯人、散髮山之幽、大笑仰青天、  
(書幅)  
古韻を用ゐるは、一家言たるに過ぎざるべけれど、その措辭意思の雄深警拔なるは、尋常作家の企て及ぶ所にあらざるなり。

竹山の長子蕉園(名は曾弘、字は伯毅)は、文藻敏捷なること、今古比孛にして、一夜に十賦を作ること再びしけり。惜いかな、天これに年を假さず、僅に三十七にして、長逝せり。その芳山看花の詩文稿を騶碧囊といふ。囊中の詩古今體三百首あり。すべて、これを杖鞋の間に得たるなり。されど、遺稿の世に傳れるは、少くて、太

牢の味に飽き難く、唯浪華詩話に載せたる聯珠體一篇と誓願寺所藏の賣花聲一絶との外は、未だ予の見ざる所なれば、爰には、賣花聲を録して、讀者に一嚮を嘗めしめんとす。風調の流暢なる、思致の清婉なる、一讀して、齒牙三日の香を留む、とやいはまし。

賣花聲

一荷紅黃春色齊、花兮叫斷又花兮、開戶香風人不見、瞥然聲在

卷門西、

この一派の盛時は、書院創設の時より、文化の頃まで、凡そ八十年間とす。特に、詩學の現象についていへば、竹山、蕉園の在りし時を極盛となす。竹山は、文化の初年に歿し、履軒は、その十三年後

に物故し、蕉園は、父竹山に一年先だつて歿しき。かゝりければ、竹山の後を承けしは、二子柳樓（名は曾縮、字は子友）にして、その後は、桐園及び並河寒泉なりき。

是より先、攝州は、詩人に乏しからざりき。入江若水は、富田の醸酒家より起りて、四方に游放し、後京師に留りて、西山樵唱二巻を著し、物服諸家の推奨を得たりき。田中富春は、池田に住し、護園派の學を唱へて、京攝の間を聳動せり。その社中の詩集を吳江水韻といひて、毎歲刊行せり。大井蟻亭も、攝人を以て、京師に寓し、講説教授したり。その家集を、覆窠篇といふ。これ等の諸家は、浪華の騷壇に影響少ければ、論評を試みず、唯その氏號と著書とを摘

録臚列するに止めおきて、更に是等と時代相先後したる一名家を、紹介せざるべからず。

鳥山芝軒（名は輔寛、字は碩夫）は、伏見より來りて、此地に住し、平生唐人に刻意し、専ら作詩をもて、生徒に授けたり。三體詩、杜詩集解、唐詩訓解等は、常に講説する所にして、別に門戸を作り、自ら稱して、詩人といへり。こは、元祿寶永の間なりき。

芝軒詩學を以て、一世に喧傳せられたりしかど、篇什は、近体律絶に過ぎざりき。當時、小笠原雲溪京師に詩肆を開きて、芝軒と旗鼓相對峙せしが、聲律格調の上よりいへば、雲溪は、芝軒に超えて上れど、詩學は、竟に芝軒より一著を輸ざるを得ずとぞ。かく芝軒の

詩名、一時に高かりしかば、遂には、九重の天まで聞えて、その詩、靈元上皇の御覽に入りて、敎感ありきといふ。刊行せし著作は、芝軒略稿五卷、芝軒吟稿七卷、和山居詩一卷等あり。

後世、芝軒の作を評せしもの二三を擧げん。龍草廬は「詩藻富贍」、田中富春は「極めて精鍊にして、世の耳剽目掇の輩と其調を同じうせず」、江村北海は「韵度勝れたれば、咀嚼して、餘味あるを覺ゆ」といへり。以上の數家は、能く芝軒の長處を發揮したりといふべし。

上 己

不向江邊泛羽觴、雨中閉戶興偏長、松煤細研桃花露、臨得蘭亭字幾行、（日本詩史）

人影次夏原吉韵

幻中幻出是何生、多態渾疑或有情、隱几逢君從後坐、杖藜見爾  
在前行、對時如語銷春晝、過處無蹤趁午晴、絕勝鬪真虎頭手、  
施朱傅白太分明、(日本詠物詩)

前にもいひしが如く、芝軒は、特に近體に長じたりしが、近體の妙  
は、最も七言に在るものゝ如し。その子香軒(名は輔門、字は通徳)  
も亦一作家にして、著書に、香軒吟稿六卷、及び遺稿二卷あり。名  
賢詩集には、その少時の作數首を載せたり。

淀河舟中

舟行三五里、帆影受風斜、綠漲鴨頭浪、白分燕尾沙、山光籠野

色、翠葉雜蘆花、落日孤城外、炊煙和暮霞、(日本詩史)

江村北海これを評じて、「體裁明媚にして、合作と稱すべし。その才  
局を論せば、乃翁に勝れるに似たり」といひしは、或は肯綮に中れ  
るならんか。乃翁の古風を作らざりしは、一見職なりしが、香軒は、  
これを善くしたり。されど、余は、却て律絶の清麗巧穩なるを採録  
して、香軒の真相となさんとするなり。

鏡水

百尺筠筒一水通、引來直入草堂中、源頭疑自武陵出、偶送桃花  
數瓣紅、(日本詠物詩)

東條琴臺は、香軒の詩を評じて、「詩風乃翁に似たり」といひしは、

是等の作に就ていひしならん。

芝軒香軒の後にありて、竹山履軒等と時を同じうして、別に一社盟を訂し、盛に風雅を揄揚し、一時四方の才俊雲集したるは、混沌詩社となす。これなん、浪華騷壇の極盛時代なりける。

關東に雄飛して、天下の文學を管領せし寛政の三博士すらも、本は皆この詩社に雖伏せしなればこそ、この一詩社の當時に重望を負ひたりし所以なれ。その盟主は誰ぞ。北海亭主人片山猷字は孝秩是なり。その創設は、實に明和の初年ありき。

茲にその社盟に與りし諸家を列舉せん。

鳥山 崧岳 (名宗成、字世章、越前人)

田中 鳴門 (名章、字子明、近江人)

細合 斗南 (名離、字麗王、平安人)

河野 恕齋 (名子龍、字伯潛、平安人)

岡 白洲 (名元鳳、字公翼、浪華人)

佐々木魯庵 (名鳳、字子岳、平安人)

葛 森庵 (名張、字子琴、浪華人)

岡田 南山 (名豹、字君章、阿波人)

大畠 赤水 (名九齡、字壽王、播磨人)

柴野 栗山 (名邦彦、字彦輔、讃岐人)

尾藤 二洲 (名肇、字志尹、伊豫人)

古賀 精里 (名樸、字淳風、肥前人)

頼 春水 (名惟寛、字千秋、安藝人)

篠崎 三島 (名應道、字安道、浪華人)

木村 巽齋 (名孔恭、字世肅、浪華人)

小山 養快 (名儀、字伯鳳、浪華人)

萱野 錢塘 (名來章、字君譽、肥後人)

隠岐 榮軒 (名秀明、字子遠、平安人)

西村 南溟 (名直、字孟清、浪華人)

菱川 秦嶺 (名觀、字大賓、備前人)

福 石室 (名尚脩、字承明、浪華人)

井阪 松石 (名廣正、字雲卿、浪華人)

荒木 商山 (名定堅、字某、池田人)

頼 春風 (名惟彊、字千齡、春水弟)

頼 杏坪 (名惟柔、字千祺、春風弟)

三井 棗州 (名善之、字文卿、浪華人)

十時 梅厓 (名賜、字子羽、浪華人)

この他、清玄道、富有明、城和光、森田士徳、平井幽暢等、吟盟に  
與りしかど、早世せしもの、又は、客中の人などにて、數々會に臨  
み得ざりしもの、如し。宮崎筠圃、皆川淇園、江村北海、村瀬栲亭、  
釋蕉中等、時に京師より下り來て、詩酒の筵に入りし事もありき。

以上、列擧したる諸子は、一時盡く集合せしにはあらで、出入に先後あり。この故に同じく社盟を訂しながらも、その名を聞いて、その面を識らざるも少からざりき。

江村北海の詩眼に映じたる混沌社の諸子の才學如何。試に日本詩選より摘鈔せん。

崧岳、醫を浪華に業とし、兼て此文を以て、稱せらる。

斗南、詩を能くし、書を能くして、時名あり。

蝨庵、少にして聰穎、初め詩を兄臧宗、菅甘谷に學びしが、實に出藍のみならず。

春水、少にして敏警、二弟あり、茲に有才を以て、稱せらる。

赤水、性文雅を好み、邸職の餘暇、日夜芸窓に兀々たり。

恕齋、幼にして美譽あり。

承明、才子の稱あり、早く没しき。

猶詩選に入りたる數子はあれど、特に表出せられたるは、この七家に過ぎざりき。然れども、この七家を以て、混沌社を代表すべきにあらず、必ず親疎の別ありて、その各家の平生を識ると識らざるに依れるならんか。これを以て、直ちに詩評とするにはあらず、唯類に因りて、こゝに附記するのみなり。

同社の會合は、毎月十六日を期して、北海亭に開くを、例とせり。相會する毎に、酒饌極めて豊かにし、盃盤交錯の間に、題を分ち



韵を探り、各詩を賦して成れば、凡上の一紙を取りて、これを書し、別に稿を立てざるなり。その腹稿熟せざれば、書せざるが故に、書するに臨みて、踟躇することもなく、又座上に故紙の飛散せることもなかりき。余その會日に用ゐたる詩箋を見しに、大凡半紙形の唐紙に十四行の烏絲欄を印したる清雅なるものなりき。一社の會集、相師友として、益を請ひ、互に推敲を定む。皆暗誦して、これを擧げ、後、北海の判断を取りて、始めて定むるなり。北海もまた師長をもて自ら居らず、小詩短文とても、皆諸子に示して、正を請ふこと、少長を問はざりき。

北海は、宇野明霞の門より出で、確く師説を崇奉して、終始變せざるものから、學術の精核は、なかくに、師の上にある。又常に師説を誦して、『名世の文は、多きにあらず、多からば、傳ること却て廣からじ。廣からずば、不朽を保ち難けん。然れども、雜にして、傳らざらんよりは、精にして、數篇あらば足りなん。』といふ。されば、自ら書を著すことを好まず、その筆記は、渾て鈔録にして、一卷の成書はなかりき。北海文集十二卷、尺牘三卷、詩集七卷、混沌社詩稿三卷等は、門人の編輯せし所にして、孤松館遺稿八卷は、義子蘊が集めしなり。惜しい哉、これ等の著書は、義子の早逝せし爲に、上梓を得ず、空しく散佚して、後人にその美を窺ふこと能はざらしむ。

北海浪華に住すること、三十餘年にして、東修以上を行ひしもの、  
三千人に及べり。盛なりといはざるべけんや。北海人と爲り、閑靜  
にして、言寡く、功名を塵埃の如くに思ひなし、聲譽高くして、諸  
侯の招聘多かりしをも、峻拒して起たず、後進なる栗山、精里、二  
洲等をして、名を成さしめしは、洵に北海の志の高きを見るに足る  
べし。北海の性情、此の如くそれ清雅なり。故にその吐囁も、すべ  
て自然に出で、雍和雅醇なり。

北海

至日小集得寒字

短褐年年江氷干、風霜獨奈鬢邊寒、窮陰欲遣窮途恨、長至相邀  
長道歡、線影添來虛堂白、葭灰吹動寸心丹、客原鶴鬣風流客、

一曲高歌雪裏看、(混沌社詩選)

後世賴山陽が論詩絶句を作りし中に、

浪速城中朋盍簪、猶從嘉萬索金鍼、茫茫混沌新穿竅、唯有聰明  
葛子琴、

と吟じて、混沌詩社中に一の盍庵を表出せるに止まれり。實に此社  
中は、盟主が物門の系統なるが爲に、以下の諸子多くは、同派なら  
ざるはなかりしが、三博士及び春水等の數家が、洛閩に歸したるは、  
姑く措き、此流派に在りて、新に混沌の竅を穿ちたる聰明の子琴は、  
齊しく嘉靖萬曆に向ひながら、獨り金鍼をば得たるなり。山陽の  
詩眼には、子琴の外は映象せざりしなり。山陽の眼孔の鉅なるを嘆

美するは、まさしく子琴の詩膽の大なるを嘆美するにこそ。

社中もと北海、魯庵、子琴、春水、二洲、鳴門、三島を併稱して、七才子といひ、嘉萬の餘風を追ひしが、中に就て、才子の第一位は、實に子琴に譲らざるを得ず。

子琴天性恬澹樂易にして、謙虛なり。その學博綜、書において、討究せざるはなく、能く素問難經に通じ、左氏は最も熟したる所なれど、人の叩くにあらざれば、言はず。この故に、詩名のみ世に高うして、その博學を知るもの甚少し。子琴の詩を作るに、韻書を檢するを見しものなく、これに就て、字音平側を詢へば、響應せざるはなかりき。

北海は、筆札及び横笛を善しくたりしが、子琴は、猶その上に、笙及び箏箏を善くし、篆刻はた妙手たり。

賴春水が赤松漁石（名は游、字は眉公）の印譜に序して、左の如くいへり。

世之評篆刻、以高孺皮葛子琴、爲稱首、子琴學于孺皮、眉公學于子琴、皆高尚人也。技亦不相上下、而世識孺皮子琴、而眉公罕有知之、……（春水遺稿）

子琴の書幅印影の今猶存せるもあれど、その御風樓集の編成りながら、未だ上木に及ばずして、己先づ逝ぎ、その孤兒鳳齋（名は膺）も程經ずして、下世せしかば、終にその期なく、隨ひて稿本も所在を失ひき。惜むべきかな。子琴が歳暮の一律は、その所業を見るべし。養病安貧一畝宮、任他年與世途窮、詩詞驚俗竟無益、藥石爲醫

較○有○功○、異○日○丹○成○須○試○火○、多○時○篆○刻○且○彫○蟲○、何○人○更○識○余○初○志○、  
獨○倚○江○樓○念○御○風○、(浪華詩話)

猶子琴の爲に、遺詩を拾はん。

咏章魚

龍○宮○曾○賜○紫○袈○裟○、手○挂○念○珠○珠○絕○瑕○、水○底○射○明○雙○眼○目○、藻○邊○舉○結○  
八○跌○脚○、春○風○波○暖○貝○爲○艇○、秋○雨○夜○寒○壺○作○家○、身○在○俎○頭○何○罪○業○、  
鉢○中○猶○捧○玉○蓮○花○、(侯鯖詩話)

晚秋野望

植○杖○西○郊○外○、秋○天○霽○乍○陰○、草○枯○無○放○犢○、菓○竭○有○饑○禽○、紫○翠○雨○餘○  
嶺○、紅○黃○霜○後○林○、未○窮○千○里○目○、渺○渺○暮○煙○深○、(日本詩選)

返魂李夫人

月○明○南○內○竟○無○情○、空○記○三○千○第○一○名○、寶○鴨○爐○頭○影○彷彿○、君○王○應○不○  
貴○長○生○、(詠史絕句)

子明家園連翹

金○華○滿○架○挂○春○光○、百○尺○垂○條○拂○地○長○、風○暖○鶯○梭○聲○斷○續○、碧○紗○窓○外○  
織○流○黃○、(皇朝分類名家絕句)

摘句

牛○背○斜○陽○山○躑○躑○、蝶○邊○流○水○野○薔○薇○、  
數○間○茅○屋○春○來○往○、一○簇○桃○花○主○有○無○、  
畫○裏○江○山○千○里○鏡○、杖○頭○花○柳○百○文○錢○、